琉球大学学術リポジトリ

沖縄県における木育活動の現状と今後の課題

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2020-10-14 キーワード (Ja): “mokuiku”, 木育, 森林, 木材, 環境教育, 森林利用 キーワード (En): forest, wood, environmental education, use of forest resources 作成者: 髙良, 美沙希, 大田, 伊久雄, 木島, 真志, Takara, Misaki, Ota, Ikuo, Konoshima, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46984

沖縄県における木育活動の現状と今後の課題

髙良美沙希[1]，大田伊久雄[2]，木島真志[2*]
[1] 内閣府沖縄総合事務局　農林水産部
[2] 琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

Current status and challenges of “mokuiku” activity in Okinawa

Misaki TAKARA[1], Ikuo OTA[2], and Masashi KONOSHIMA[2*]
[1] *Agriculture, Forestry and Fisheries Department, Okinawa General Bureau, Cabinet Office*
[2] *Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus,*

要約

木育とは 2004 年に北海道で誕生した「日常に木を取り入れる」取組である．沖縄県では，2014 年に策定された「沖縄県森林・林業アクションプラン」において県産材の利用促進という観点から木育を推進しており，県内各地で様々な木育活動が展開されている．本研究では，県内で木育活動を実施している様々な団体への聞き取り調査と，木育イベントへの参加者などに対するアンケート調査をもとに，県内の木育活動の現状と課題を明らかにし，今後の沖縄県に必要な木育の展開について考察することを目的とした．聞き取り調査の結果から県内の木育活動の目的は林業振興・環境教育・幼少教育の 3 つに分類できることが分かった．また，木育講座の要望は増加傾向にあるものの，木育を担う人材が不足していることが明らかになった．木育イベント参加者へのアンケート調査の結果からは，森林散策や動植物の観察会等，森林を活用したイベントなどが望まれていることが明らかになり，現状の木工体験を中心とした木育活動に加えて新たなメニュー開発が課題であることが分かった．

キーワード: 木育，森林，木材，環境教育，森林利用
Key words: “mokuiku” , forest, wood, environmental education, use of forest resources

*Corresponding author (E-mail: konoshim@agr.u-ryukyu.ac.jp)

1 研究背景

日本では古くから「木の文化」を発展させてきたが，日本人の生活スタイルの変化により，日常生活において木に触れる機会は減少している．これにより紙や家具，建築物やキノコなど，森林から得られるモノや食べ物から木や森を連想することができない消費者が多くなっている．そのような状況の中，木を日常に取り入れる取り組みとして 2004 年に北海道で「木育」という言葉が誕生し，各関係団体が取り組みを進め，次第にその理念や活動内容が定着した．その後政府による「森林・林業基本計画」で木育という言葉が明記されたことをきっかけにその活動が全国規模へと発展し，現在，各地で様々な取り組みが行われている．

沖縄県においても，ウッドスタート宣言の採択（国頭村）や，木育キャラバンの開催，東京おもちゃ美術館全国初の姉妹館(「やんばる森のおもちゃ美術館」)の開館等，県内各地で木育活動が行われ始めている．また，2014 年 9 月に策定された「沖縄県森林・林業アクションプラン」[1)]の中で県産材の利用促進という観点からも木育が推進されており，森林や木の文化への理解を深め，木の良さを体感してもらうことで木製品の良さを伝えていくことは，県の林業発展に貢献するだけでなく，県民に自然をより身近に感じてもらうきっかけになると考えられる．

木育の先進地といえる北海道や熊本県，林野庁，民間団体等は，それぞれ独自に木育の理念をまとめ，活動を体系化している．一方，沖縄県は活動主体各自の理念を基に取り組みを行っているものの，体系化にまでは至っておらず，また，沖縄県の木育活動を対象とした研究もほとんどない．世界的にも貴重で豊かな亜熱帯の森林を有し，本土とは異なる林業経営を行っている沖縄県においては，木育の活動を独自の視点で捉え，今後の沖縄県に必要な木育の在り方を考察する必要がある．

そこで本研究では沖縄県内で展開されている木育活動の現状を明らかにすること，そして，そこから課題を発見し，今後の沖縄県に必要な木育の展開について考察することを目的とする．さらに，利用者を対象にアンケート調査を行うことで，実際に県民がどのような活動内容を望んでいるのかを調査し，より良い木育イベントの開催に役立てる．

1.1 木育の発祥と定義

木育という言葉は 2004 年北海道にて誕生した[2)]．「女性知事リレーフォーラム in ほっかいどう」において，当時の北海道知事が「木や森を作ることに伴う人づくりが大切である」と木育について発言したことに始まる．当時北海道では，道産材供給率が 34%にまで低下し(2000 年度)，道産材の利用促進が課題となっていた[3),4)]．そして北海道協働型

政策検討システム推進事業の 2004 年度テーマとして「木育」が決定し，同年「木育推進プロジェクトチーム」が発足された．ここで木育の意義や必要性等が検討され，木育の理念や目的等が設定された [5]．翌 2005 年には，木育推進プロジェクトチームを中心とした民間団体「木育ファミリー」が発足し，北海道庁主催のイベント等において本格的な木育普及活動が行われるようになった [4]．2006 年には政府による「森林・林業基本計画」が閣議決定され，「林産物の供給及び利用の確保に関する施策」において木育が明記された．2007 年には林野庁が「木材産業の体制整備及び国産材利用拡大に向けた基本方針」の中で，木育推進の具体的な内容を明記した [6]．その後，木育活動促進助成事業を通して，木育が全国的な取り組みへと広がった．近年では，「木育マイスター育成研修」（北海道）など木育を担う人材育成が展開されている [5]．2014 年には，北海道と木育ファミリーが主催する「木育の 10 年をみつめて～木育 next10」 が開催された．この頃からグット・トイ委員会主催の「木育サミット」等，全国規模の取組が行われるようになり，その取り組み主体も多様化している．このように環境意識の高まりや，森林の適切な整備の必要性による木材の積極的な利用の推進等を背景に木育が誕生し，林野庁がこれを推進したことをきっかけに全国規模の活動へと発展している．

木育は定義が曖昧であり，具体的な活動内容を明確にしているわけではない．主催する個人がそれぞれ理念を持ち，森林や自然環境に触れる活動であれば，どのような活動であっても「木育」ということができる．木育推進プロジェクトチームでは「木にふれる・木に学ぶ・木と生きる」の木育の 3 ステップを設定している．これを基本として自由に活動できることが木育の特徴であり，その活動の幅広さを示している．

このように，木育が目指すのは木や森に触れ合う体験をきっかけに，日常生活の中に木を取り入れ，木に親しむことまでを含んでいる．木材利用の教育手法としての性格を持っていることが，森林環境教育と木育の違いである [7]．森林環境教育は主に，人が森林に行き，そこで自然に触れる体験である．一方で木育は，森林環境教育の活動も含みつつ，日常生活の中に木を取り入れるという，さらにステップアップした取り組みであると捉えることができる [7]．自然に触れながら，木材に関することや森林の利用等にまで焦点を当てた取り組みであり，まさに現在の森林管理の現状に必要な取り組みであると考えられる．

1.2 先行研究

煙山 [7]は全国各地で行われてきた木育活動を紹介し，木育や自然に対するそれぞれの理念をまとめている．これにより豊富な事例と写真を用いて木育活動の幅広さとその魅力を示している．田口 [8]は熊本県内で行われている木育活動を事例に，「森林親和運動」としての木育をモデル化している．そこでは，木育を「木や森に対する人間の社会的・文化的な関係を再認識・再構築する活動」と位置付けており，木材需要の拡大を目指す「消費者教育としての木育」が都市住民の生活に適合しないことを指摘し，木材需要の拡大を目指すためには単なるモノ作り体験ではなく木や森を理解できるような「生活体験」が必要であることを示している．また木育を行うための資源の確保と運用の難しさや，開催地の偏り，受け入れ可能な人数の確保等の問題も指摘している．

また『宮崎県の木育ネットワーク』[9]では，宮崎県で行われている木育の活動が紹介されており，木育の継続的な実践活動が必要であることや保育園や学校などの施設側にも木育の理解者が必要であること，活動の成果を発信できるツールの必要性等を示している．

沖縄県の木育に関しては，多田 [10]が国頭村の木育について紹介し，おもちゃ美術館の開館プロセスや木育による地域活性化の手法を解説している．また「やんばる森のおもちゃ美術館」の開館経緯を紹介し，当施設ができたことによって周辺施設の入場者数が増加し，観光施設として大きな役割を果たしていると述べている．しかし，沖縄県の木育に焦点をあて全体的な取り組みを対象とした研究はない．それゆえ，木育活動が活発化する中，県内の木育活動を調査し，課題を明らかにすることにより，今後の沖縄県に必要な木育の活動を考察する必要があると考えられる．

2 調査方法

本研究では以下 3 つの方法により調査を行った．

①聞き取り調査

木育のイベントを開催している公共団体，民間企業等を訪問し，担当者に対して直接聞き取り調査を行う．聞き取り方法は対面で，予め質問事項を用意し全ての調査対象において共通の質問を行った．木育の活動を始めた経緯と目的，実際に行っている活動の内容，経済効果の有無，今後の意向，その他木育に関する理念等を調査内容とした．

②アンケート調査

2018 年度に開催される木育イベントと常設の木育関連施設において，利用者を対象とした木育に関するアンケート調査を行う．アンケート内容についてはイベントに参加した主な目的や感想，今後木育のイベントとして参加してみたいと感じるイベントの内容等，今後の木育イベントの開催に役立てることができるようなアンケート内容とした．A4 用紙裏表 2 枚のアンケートを用意し，木工体験に参加している子の保護者にアンケート用紙とバインダー，ボールペンを預け，木工体験が終了するまでに書いていただくこととした．本研究では，国頭村森林組合が主催する安波ダムクイナ祭りの木工体験コーナーとやんばる森のおもちゃ美術館で，アンケート調査を行った．また一般的な木育の認知度等を調べるため，木育のイベントや関連施設とは無関係の一般の方を対象に，同様のアンケート調査を行った．

③既存資料の収集

過去に行われた木育のイベントについては，開催当時各事業体が行った既存のアンケートを入手し，木工体験を通しての感想や意見等から分析を行った．

本研究では，規模や内容に関わらず沖縄県内で実際に「木育」という言葉を用いて活動している活動を対象とした．本研究で取り上げる木育活動の定義としては，イベント等の主催者が「木育」という言葉を用いて，木材や木，自然と関わる活動を行っているものとした．「木育」という言葉を用いていない場合は対象としない．運営主体である主な調査対象は以下の 6 か所とした．

I. 沖縄県農林水産部森林管理課・南部林業事務所
II. 国頭村役場経済課
III. 国頭村森林組合
IV. やんばる森のおもちゃ美術館
V. おもちゃ店を運営するＡ社
VI. Ｂ工房

その他，上記の調査対象が主催する木育講座を仲介している機関や環境教育を行っている以下の4か所において追加調査を行った．

I.　沖縄県平和創造の森公園
II.　沖縄県社会福祉協議会　沖縄県いきいき長寿センター
III.　はえばるエコセンター
IV.　やんばる自然体験活動協議会

3　木育の活動主体と取り組み内容

3.1　沖縄県　農林水産部森林管理課・南部林業事務所

3.1.1　取り組みの経緯と目的

沖縄県農林水産部では，木育という言葉が誕生する以前から環境教育としていくつかの事業を行っていた[11]．木育という言葉を使用するようになったのは，林野庁が木育を取り上げ始めたことや2011年度の木育キャラバンの誘致がきっかけである[11]．他の出先機関においても木育の活動は行われているが，本研究では森林管理課と南部林業事務所で行われている木育について調査することとした．

きっかけとなった木育キャラバン推進事業とは，2011年度に沖縄大学で開催された「木育キャラバンinユッカヌヒー」というイベントのことで，沖縄グッド・トイ委員会主催の木育キャラバン事業である．「木のおもちゃ」や「あそび」を通して木育を推進し，沖縄県産の木製品の良さを県民に普及することを目的として「あそび広場」の開放や木工体験のできるワークショップの開催，木や木育に関することを学ぶパネル展示などが行われた．「木のおもちゃと遊び広場」では東京おもちゃ美術館の300点以上の木製玩具や，国頭村森林組合のリュウキュウマツの積み木5,000ピース等沢山の玩具が用意され，大人も子供も楽しめる空間を提供した．二日間のみの開催であったにも関わらず来場者数は3,700人を超え，予想を上回る来場客で会場が賑わった．

2011年から2013年には木育指導者(推進員)養成事業が行われ，木育を実施する指導者を養成するための講演会や養成講座が開催された．熊本大学教授の田口浩継氏を講師に迎え，3年間で合計約90人が木育指導者としての認定を取得した．2016年度から2年間は県産材需要拡大推進事業として「山の日」と関連付けた木育のイベントを開催しており，現在は県内中南部の小学生を対象とした木育出前講座を中心に木育活動を行っている．

森林管理課が行う木育の主な目的は「森林の管理や林業への理解の醸成」と「県産材の利用促進」である[11]．人口が集中し木材の消費地となっている中南部の県民に，森林や木材について知ってもらい，木材を利用してもらうことは，林業の振興だけでなく，森林の適切な整備につながることも期待できる．消費者に木の魅力を知ってもらうことで，他の素材ではなく「木材を選択する」消費者の育成を目指している．「沖縄県森林・林業アクションプラン　うまんちゅの森づくり」においても，木育は県産材の利用促進の一つとして位置付けられており，木育を通して木材利用の意義や森の役割について理解を深め，県民に「木と生きる」暮らしを送ってもらうことを期待している．

したがって森林管理課で行われている木育講座では，座学で森林・林業・環境について学ぶことを大切にしている．木を伐ることは森林を破壊しているのではない．木を適切に伐採し利用することは重要であり，伐って，また植えて，しっかりとした管理のもとで木を育てることが必要なのである．そうした森林の循環利用を学ぶことによって，森林や林業，木材への理解を深め，環境問題にまで関心を持ってもらえるようなカリキュラムを提案している．

3.1.2　活動内容

現在は，以下の3つの木育関連事業を行っている．

①木育出前講座

県内中南部の小学校やその他中南部地域の市町村，一般市民等を対象とした木育出前講座を主な活動として行っている．これは木育教室(座学)と体験メニューの2つのプログラムで構成される．本講座で取り組まれる木育は以下の3段階で進められる．

Step1「触れる」：木材の良さを体感的に理解すること
Step2「創る」：木材などを使って何かを創ることにより，材料としての特徴を理解し，想像的な思考で問題解決する能力を高める
Step3「知る」：木材と環境との関係を理解し，地球環境に配慮した行動ができる

本講座では，小学生が対象となるため「創る」と「知る」を中心とした取り組みが適当であるとしている．

「創る」ステップでは，マイ箸作りや本棚作りなどの木工体験，自然の枝や葉，木の実を使ったネイチャークラフト，キノコ栽培のメニューがある．

「知る」ステップとなる木育教室(座学)では，森林の多面的機能や木材が生産されるプロセス，木材の多様な利用方法，森林の循環利用と適切な森林の管理等を対象学年に合わせてわかりやすく解説する．また校庭や近隣公園などの身近な樹木に触れる植物観察会では，実際に木や森と触れ合う体験をすることにより自然をより身近に感じ，樹木や自然環境への関心を高めるプログラムとなっている．

講義は林業普及員の県職員が行い，小学校の教室や体育館，イベント会場等で開催される．本講座を開講するためには，森林管理課が各市町村の教育委員会に公募している応募用紙，又は森林管理課ホームページに掲載されている申込書にて直接申請する必要がある．2017年度は小学校やその他イベント会場等を合わせて13回の講座を開講し，合計700人以上が受講した．県内中南部の小学校を中心に年々依頼が増加しているが，普及員の人数等の理由からこれ以上の対応は難しい．木育出前講座の要望が増加しているが人員に限りがあり対応できていないこと，クラフト体験メニューが中心でフィールド体験や森林・林業につながるメニューが少ないことが課題である．

②木育体験箇所の設置

南部林業事務所では，林業普及員が対応しなくても一般の人が日常的に木育の体験ができるような木育体験場所を準備している．現在は糸満市の平和創造の森公園と座間味村阿嘉の青少年旅行村キャンプ場に木育体験箇所として石窯を設置した段階であり，今後は実際に使っていくための現実的なシステムの企画が必要である．

③新規メニューの開発と関係者団体の育成指導

現在行われている木育のメニューは木工体験やクラフトが中心で，森林・林業に繋がるプログラムが少ない．今後さらに木育の活動を発展させるため森林を活用した新規メニューの開発を行っている．現在TLUDストーブを利用した木炭製作やソリを使って木材を搬出する林業体験メニュー，林地残材を活用したウッドキャンドル作りを考案している．これらの新規メニューの開発と並行して行っているのが，関係者団体を対象とした木育指導者の育成である．木育体験場所として設置された平和創造の森公園の職員や座間味村の関係者を中心に考

案した新規メニューを実際に行っていくための技術指導を行っている.

3.1.3 今後の意向

今後森林環境税が課されることになったこともあり環境への関心は高まると考えられる. 世界遺産登録の推進等からも, 沖縄の森林・自然・林業について県民に正しく理解してもらう必要性が高まっているといえる. 教科書に森林や林業のことがあまり載っていないように, 現在の教育で森林や林業, 環境について学ぶ機会は極めて少ない. このような現状にあるからこそ, 自然の適切な利用方法を考え伝えていく必要があり, このような活動は絶えず伝えていかなければならない. 現状としては今後も木育の活動は続けていく予定である. そのために木育出前講座で森林・林業の理解を深める活動と並行して, 森林や林業について深く話すことができる木育の指導者も養成していく必要があると考えている.

今後は, 引き続き木育出前講座を実施し, その回数を増やすための人材育成と講座内容の充実のため新規メニューの開発に取り組むこととしている.

ただし現在行っている木育は, 教育ではなく産業振興のための手法の一つであり県産材のブランド化と消費の推進という位置づけであるため, 木育だけに力を入れていくという認識ではない. 木育を行うことによって消費者を教育し, それが実際に木材の消費やその他の経済効果につながるという期待は長期的である. だからこそ他の事業と並行しながら長期的な視点で, 継続していけるようなカリキュラムの考案が必要である.

3.1.4 平和創造の森公園の取組

木育体験場所として石窯が設置された平和創造の森公園にて, 木育イベントに関する聞き取り調査を行った. 平和創造の森公園は, 第44 回全国植樹祭の開催意義である「平和で緑豊かな環境を作り, 次の世代へ引き継ぐこと」を目的として平成 10 年 4 月に開園した. その後, 県が指定管理制度を利用して森林組合連合会に管理を委託している.

①木育体験場所の設置について

沖縄県森林管理課の木育体験場所として, 平和創造の森公園に石窯が設置されている. 県産材の薪を平和創造の森公園が販売し, それを石窯で使ってもらうことにより, 普及員がいなくても木育が体験できるシステムを検討している. しかし薪の仕入れ先や実際の販売価格, 石窯の貸し出し方法等, 石窯の運用に関するシステムを定めることができていない状況にあり, 本確的な石窯の木育利用は実現していない.

②開催イベントについて

平和創造の森公園では, 石窯が設置されている他にも木育イベントを開催している. イベント内容としては主に3つの取組を行っている. 2018 年度は 8 月 11 日(土)に平和創造の森公園管理棟付近の広場にて山の日の特別イベントを開催した.

◆マイ箸・スプーン作り

箸やスプーンが作れる程度の木片を用意し, 彫刻刀を使って形を作っていく作業を行う. ある程度形ができたらペーパーで磨き, 最後に油やニスを塗って完成させる.

開催時間:13 時～17 時(受付時間:13 時～16 時)

体験料金:1 人 300 円

◆木の実験教室

「燃料」としての木の利用について学ぶ炭作り, 植物が水を吸い上げる様子を観察し「植物のパイプモデル」を学ぶ給水実験, 葉の形や付き方を観察し, 葉脈標本を作る実験の 3 つを行う.

開催時間:14 時～　体験料金:1 家族 1,000 円

◆木灰汁そば作り体験

沖縄のそば打ちを, 沖縄の伝統製法で体験する. ガジュマルの灰を水に溶かして木灰汁を作り, これをつなぎとして生地を打つ. しばらく生地を寝かせた後, 細く切って麺にし, 沖縄そばを手作りする.

開催時間:10 時～12 時, 11 時～13 時

体験料金:親子 1 組(大人 1 人, 子供 1 人)2,500 円

1 人追加ごとにプラス 500 円(1 人参加は 1,500 円)

③今後の意向

平和創造の森公園管理事務所としては, 今後も木育イベントの開催場所として施設を提供する意向である. 「木を伐ることはだめなこと」という認識が少しずつ変化していると感じるのは, 木育の成果であるといえるかもしれない. しかし林業普及員がいなくても木育が体験できる場所の設置は難しいと考えている. 糸満市という遠い場所まで足を運んでもらうためには, 魅力のあるイベントが必要である. 利用者から石窯を使いたいという要望も多く寄せられているため, まずは薪の仕入れ先や価格や貸し出し方法, 安全管理等, 公園施設を現実的に活用していくためのシステムの開発を進めていかなければならない.

3.2 国頭村役場 経済課

3.2.1 取り組みの経緯と目的

戦前から林業を主な産業としてきた国頭村は豊かな森林に恵まれ, 地元材で作った机や椅子を小学校へ提供していたことや, リュウキュウマツの積み木を使った地元材の PR 活動を行うなど, 木育を進めていく基盤が十分に整っていた. また森林や環境等への関心が高まっている中, 今後の林業の振興のための PR 活動としても木育は良い取り組みであった.

木育を始めるきっかけとなったのは, 2011 年に行われた木育の講演会である. 東京おもちゃ美術館館長の多田千尋氏が, 沖縄県で初めて木育の講演会を行った. その講演会に参加していた国頭村役場の担当者が声を挙げ, 2012 年度に採択された沖縄振興特別推進交付金により木育キャラバンを国頭村に誘致し, 出張おもちゃ広場事業が始まった. 同時に「森のおもちゃ広場」等整備事業として森林公園の施設を改装し, やんばる森のおもちゃ美術館がオープンした(平成 25 年度工事完了 10 月プレオープン 平成 26 年 4 月オープン). 2014 年度にはウッドスタート宣言をし, 木育キャラバンの開催や木工職人の養成等現在も幅広い木育活動を行っている.

国頭村は, 村の主要産業である林業の振興や強化を目的として木育を推進している. 木材の良さを伝え日常に木を取り入れる運動である木育を進めることは, 木材の普及・啓発へと繋がり, 国頭村の林業を PR する手段となりうる. 今年国頭村の木育に関するパンフレットが完成し, さらなる活動を展開している.

3.2.2 活動内容

現在は 4 つの木育関連事業を行っている.

① ウッドスタート宣言(2014 年～)

ウッドスタート宣言とは，認定 NPO 法人日本グッド・トイ委員会が展開している木育の行動プランのことである．感性豊かな乳幼児に国産の木製玩具を「ファーストトイ」として与えることを推奨し，良い木製玩具を提供することで若い両親を木のファンに育て，国産材の消費拡大につなげること，そして木工業に地産地消の流れを創ることで地域の活性化を促すことを目標としている．ウッドスタート宣言をした市町村が必ず行わなければならないことは，地元で生まれた赤ちゃんに地元材を使って地元の職人が作った地産地消の玩具を贈ることだ．この取組が定着すると，次に求められるのが小中学校の机と椅子を地元の木材を使って作ること，更に園舎や校舎の木造化又は内装の木質化，小中学校の授業に木育を取り入れること等である．この取組は 2011 年の東京都新宿区が宣言したことに始まり，2018 年 4 月現在全国 39 の市町村と 22 の民間企業がウッドスタート宣言をしている．2015 年には環境省の「グッドライフアワード 2015」において環境大臣賞グッドライフ特別賞を受賞しており，多くの団体から賛同を得て注目を集めている．

国頭村は 2014 年にウッドスタート宣言をした．沖縄県内でウッドスタート宣言をしているのは国頭村のみである．国頭村に出生届を提出すると，その場で出生祝い品として地元のリュウキュウマツで作った「リュウキュウマツの積み木」が贈られる．この取組は現在も行われており，年間約 40 人の赤ちゃんに贈られている．

この積み木に使用している木材は，漢那ダムを建設した際に伐採した大量のリュウキュウマツと，毎年村有林で伐採しているリュウキュウマツである．村が国頭村森林組合に委託し，伐採から製作まで行っており，県や国からの補助金等はではなく，全て村の年度予算で企画している．受け取った両親からも喜ばれており，今後も続けていく予定だ．まだ始めたばかりであるが，国頭村森林組合と協力しながら進めていきたいと考えている．写真 1 は実際に贈られるリュウキュウマツの積み木である．

写真 1 リュウキュウマツの積み木

② 新 1 年生の木机・腰掛事業

ウッドスタート宣言のステップアップともいえるのがこの木机・腰掛事業だ．この事業は 15 年以上前から続けられており，ウッドスタート宣言をする以前から国頭村内の小学校で行われていた．小学校の入学式前日に親子で机と椅子を組み立てるという取組である．6 年間大切に使用した机と椅子は，卒業式の前日に自宅へ持ち帰ることができる．組み立て作業を開始する前には国頭村の森林や木材のことなども説明し，森林・林業について勉強してもらうこととしている．予め加工された木材を体育館に用意し，材や木目の模様，色などを見ながら好きなパーツを選択し組み立てる．机も椅子も高さ調節が可能な造りとなっておりしっかりと 6 年間使用することができる．現在辺土名小学校と奥間小学校で行われ，毎年 40～50 人が製作している．使用されている木材は，毎年村有林で伐採しているウラジロエノキである．

③ 木育キャラバンの開催

国頭村森林組合，やんばる森のおもちゃ美術館と協力して，依頼のあった保育園や児童館等に約 5,000 個の積み木とヤンバルクイナのたまごプールを貸し出すおもちゃ広場の開設を行っている．主に中南部の児童館や保育園からの要望が多く，2018 年度は名護市や金武町などの北部地域をはじめ，北谷町・西原町・南風原町等の幼稚園・保育園で木育キャラバンを開催した．

写真 2 は，北谷町障害者地域活動支援センターで行われた木育キャラバンに参加させていただいた時の子供たちの様子である．10 人程度の子供たちとその保護者が来場しており，10 時から 12 時の開催時間の間，大量の積み木とたまごプールで楽しそうに遊ぶ姿が見受けられた．

写真 2 木育キャラバンの木の玩具で遊ぶ子供達の様子

④ やんばるクラフト 職人養成講座

森林資源を活用した木工職人の育成と地域産業の振興を図る取組が 2015 年 4 月から 2018 年 3 月の期間に行われた．国頭村の木材を有効に活用し，村内の雇用拡大と木工品の販売による地域産業の振興を目的としている．大分県の木工芸デザイナー時松辰夫氏を講師に招き，村内の貴重な森林資源を活用する木工職人を養成する．この取り組みにより 3 人の木工職人が養成され，それぞれ個人の工房を設立し作品を製作している．村内での販売はもちろん，大量消費地である那覇市(中南部地域)への出店も予定している．

3.2.3 今後の意向

国頭村の木育は，林業の振興や強化を目的とした取り組みの一つであり，森や木を使った取り組みとして，木材の普及啓発，PR 活動として位置付けられている．国頭村は戦前より林業を主産業として生活を営んできたこともあり，役場内の設備の多くに木製品が取り入れられ，机や椅子，職員の名札等，日常的に木材を活用している．

木育の活動に直接的な経済効果があるとはいえない．しかし，木育による効果であるとはいえないかもしれないが，木育も含めたこれらの普及啓発活動により，国頭村の木材関連産業の売上は上昇傾向にあると感じている．今後は，国頭村独自の森林・林業に関するパンフレットを作成し，木育だけでなく，林業の振興につながるような取り組みを行っていきたいと考えている．

3.2.4 利用者の認識

今回調査を行っている際，ウッドスタート宣言の木の積み木を実際に出生祝い品として受け取った方と木机・腰掛事業で実際に作った方にお話しを伺うことができた．個人情報を聞くことができなかったため，一般の方ではなく役場職員の 2 名にお話しを伺った．ここでは一つの意見として参考にすることとする．

ウッドスタート宣言による木の積み木の出生祝い品に関しては，村内においても認知度は低い．役場側としても積極的にこの取り組みをPRしているわけではなく，まだ開始したばかりの取組であることもありウッドスタート宣言をしていることを知らない村民も多いと思われる．お話しを伺った方も，積み木をもらえることは知らずに出生届を出したら積み木がプレゼントされたと仰っていた．

小学 1 年生を対象とした，木机・腰掛事業で実際に机と椅子を製作した方は，「入学式の前日，実際に各部品の木目や色等，自分たちで選び，組み立てることができるので，とても楽しかった．長女は既に小学校を卒業し，自宅に持って帰っているが，中学生となった現在もドレッサーとして使用している．兄弟が多い家庭では，上の子が持ち帰った机と椅子を下の子が自宅の学習机として利用している家庭も多い．6 年間愛用し，思い出が沢山詰まった机と椅子を持ち帰ることができるため，落書きや傷，友人からの寄せ書きも自分だけの良い思い出になっている．本人たちはこの取り組みが当たり前だと思っているため特別感を抱いているわけではないと思うが，これから多くの人と出会う中で特別な思い出であることを次第に認識していくのではないか．小学校だけの取り組みで，中学校では実現していないことが今後の課題ではないか．」と話していた．

国頭村では積極的な木育活動を行っているが，その認知度が低いことが今後の課題として挙げられる．他の調査をしている際に「木の玩具の貸し出しがあったら取り入れたい」という意見が多く得られたが，国頭村の木育キャラバンについては知らなかった．作成したパンフレット等を活用し PR していくことで，今後の活動が充実すると考えられる．

3.3 国頭村森林組合

3.3.1 取り組みの経緯と目的

国頭村森林組合が木育を始めたのは 2008 年頃である．当時はまだ木育という言葉が一般化しておらず，流行しつつあったエコツアーの一つとして木材を使った木工体験プランを考案した．森林環境教育として村のお祭りでイベントを開催したことをきっかけに始まり，現在は木育の取り組みとして継続している．

イベント開始当初は林業への理解を深めてもらうこと，森林組合の仕事を知ってもらうこと，森林環境教育として木に触れる機会を提供することの 3 つを目的としていた．「木を伐る＝環境破壊」という認識を払拭するために，適切に管理することが重要であることを知ってもらう活動としてウッディフェアや村のお祭りで無料のキッズスペースを開放していた．木工体験や木の玩具を提供していると利用者から高評価を得て，次第におもちゃを売ってほしいという要望も増加した．現在は当初の目的に加え，産業としての林業振興の手段として発展している．

国頭村森林組合の木育の対象者は「親子」である．お箸作りなどの体験イベントは親子で参加してほしいという．親子で林業について知ってもらい，木の良さを感じてもらうことで，日常に木を取り入れる（木製品の購入）ことにつながると期待している．

3.3.2 活動内容

国頭村森林組合が現在行っている取り組みは以下の 2 つである．

① 木工体験コーナーの設置

村内外で行われているお祭り等のイベントで木工体験コーナーを開設している．木工体験のメニューは，マイ箸づくり・ヤンバルクイナのたまご作り・コマづくり・ヤンバルクイナのキーホルダーづくりの 4 つである．また年に 1 回程度県内の中学校に行き，木育講座と合わせてマイ箸づくりを行っている．木工体験で使われている木材はリュウキュウマツとイタジイが主で，組合が経営するフローリング工場と集成材工場の端材を有効活用している．

本調査では木工体験コーナーの参加者を対象としたアンケートを行うため，2018 年 9 月 22 日（土）にやんばる学びの森で開催された安波ダムクイナ祭りの木工体験に参加させていただいた．木工体験は先述した 4 つのメニューが行われた．

◆マイ箸づくり

予め用意された細長い木片を国頭村森林組合が開発したカンナで削り，大まかにお箸の形を作る．ペーパーで磨き，電熱ペンを使ったウッドバーニングで自分好みにアレンジする．

◆ヤンバルクイナのたまご作り ◆コマづくり

専用の機械を使って木片を削り，たまごやコマを作る．

◆ヤンバルクイナのキーホルダーづくり

ヤンバルクイナの姿が模られた木片に色を塗ってキーホルダーを作る．

開催時間：10 時～16 時

体験料金：1 人 500 円

② 木育キャラバン

県内の施設にヤンバルクイナのたまごプールと積み木を貸し出す木育キャラバンの開催を行っている．現在約 5,000 個の積み木とたまごプールを所有し，国頭村役場経済課と協力して村内外の施設やイベントに貸し出している．すでに国頭村役場経済課の取組として紹介しているため，ここでは省略する．

3.3.3 今後の意向

現在，木製おもちゃの販売や木育による直接的な経済効果は見られていないが，普及活動のステップアップとして今後は経済効果も期待できるのではないかと考えている．今後も木工体験と木育キャラバンの 2 つの取り組みは続けていく方針だ．また昨年ヤンバルクイナのたまごを作る新しい機械を導入したため，リュウキュウマツやイタジイ，エゴノキなど，沖縄特有の木材を使ってたまごを作り，販売促進していきたいと考えている．2018 年 5 月にはヤンバルクイナのたまごを台湾に出荷しており，沖縄ブランドを活かして県内だけでなく県外・海外への市場展開も検討している．SGEC を取得してから認証材によるおもちゃや，その他製品の製作にはまだ至っていないが，認証材であることを今後のアピールポイントにすることも視野に入れている．また今後森林環境贈与税が導入されるため，他の市町村を対象にたまごプールやリュウキュウマツの積み木の販売も強化していく予定だ．

3.4 国頭村森林公園 やんばる森のおもちゃ美術館

3.4.1 取り組みの経緯と目的

やんばる森のおもちゃ美術館は，東京おもちゃ美術館の全国初の姉妹館として国頭村森林公園内に開館した．出張おもちゃ広場事業

と同時に進行され，一括交付金とクラウドファンディングを合わせて開設資金とし，かつて森林公園の林業研修施設であったフロアを改装し，2013 年に工事完了，翌年 4 月にオープンした．

やんばる森のおもちゃ美術館は，子供たちに木のおもちゃで遊んでもらうことを最大の目的としており，木製玩具による幼少教育が木育の主な目的である．

全国でおもちゃ美術館事業を拡大させている認定 NPO 法人芸術と遊び創造協会理事長の多田千尋氏は，自身の木育の目標を「国産材の木のファンをつくること」と「木育で地方創生を行うこと」としている．東京おもちゃ美術館では木育を「木が好きな人を育てる活動」と位置付けており，その目的として「木育かきくけこ」を提案している．

か：環境を守る木育
き：木の文化を伝える木育
く：暮らしに取り入れる木育
け：経済を活発にする木育
こ：子どもの心を豊かにする木育

木育は「こ」だけであるという認識が強いが実はそうではない．木製玩具を贈る・もらうことからスタートして子供のころから木と触れ合い，若い両親が「木のファン」になることで日常に木製品を取り入れたり，将来木造住宅を選択したりと，長期的なマーケット作りになると考えている．また地元の木材を使うことで林業が栄え，地元の職人に玩具を作ってもらうことで地元の雇用につながるため，木育は十分な地方創生になりうる．おもちゃ美術館事業は，教育や林業振興だけでなく，地域活性化や地方創生をも目標にした取り組みなのである．おもちゃ美術館事業の全国的な取り組みとしては現在 4 つのおもちゃ美術館を運営し，新たなおもちゃ美術館の開館を検討している．

3.4.2　やんばる森のおもちゃ美術館の現状と取組内容

やんばる森のおもちゃ美術館は開設 5 年目を迎えているが，美術館の経営としては厳しい状況にあるようだ．プレオープン当初は年間来場者数 2 万人を超えており，売り上げも好調であった．しかし現在の来場者数は下降傾向で売り上げも低下している．2014 年 3 月までは，モニター調査もかねて入館料を無料としていたが，入館料の徴収を開始したことや珍しさから来る客数が落ち着いたことが原因と考えられる．場所が遠いこともありリピーターの獲得が難しいのが現状だ．しかし減少傾向にはあるものの 2017 年度の年間来場者数は 1.5 万人であり，休日だと最大約 50 組の親子連れが訪れる．県内の中南部からくる親子連れが多く，場所が遠くても美術館の評判を聞いて来場する客は確かに存在する．また国頭村森林公園内の宿泊客も美術館を利用しており，観光施設としても知名度を上げている．

館内にはヤンバルクイナのたまごプールをメインに，国頭村森林組合や県内の木工作家が作った玩具をはじめ多数の玩具を取り揃えている．また後述の浦添市でおもちゃ店を運営する A 社からは県外・国外のおもちゃを仕入れて館内に取り入れている．さらに館内入り口付近におもちゃの販売スペースを併設し，美術館においてあるおもちゃの販売も行っている．入館料やおもちゃの販売による収益は，すべて美術館の運営費用に充てられる．

開設当初は GW などの長期休みに，来場客の獲得のため美術館前の広場を使って木育関連のイベントを独自に行っていたが，現在ではお祭りや木育キャラバン，ウッディフェア等のイベントの際に，出張おもちゃ美術館として，たまごプールと積み木のキッズスペースを無料開放している．調査で参加した漢那ダムクイナ祭りでも，出張おもちゃ美術館が解放されていた．

3.4.3　今後の意向

やんばる森のおもちゃ美術館では今後も美術館の運営と出張おもちゃ美術館事業を進めていこうと考えている．芸術と遊び創造協会では更におもちゃ美術館事業を拡大しており，2018 年 4 月には「長門おもちゃ美術館」（山口県長門市），同年 7 月には「鳥海山木のおもちゃ美術館」が開館している．今後は，おもちゃ美術館同士の交流も検討している．

3.5　A 社

3.5.1　取り組みの経緯と目的

今回浦添市にある，おもちゃ店 C を運営している A 社代表取締役 T 氏の取り組みを調査させていただいた．

以前は大手おもちゃメーカーに勤めており，玩具の商品開発等を行っていた．ヨーロッパのおもちゃや絵本は本物そっくりのリアルなものが多く，デフォルメされた日本のおもちゃの在り方に疑問を持つようになった．そこでキッズビジネスではなく，子どもの成長に相応しいおもちゃはどのようなものなのかを広めるための現在の活動を開始した．そして子どもにとって最良の素材とは，プラスチックや鉄等ではなく「木」であると考えた．木の玩具の重さ・質感・音・香りが五感を刺激し感性を育て，心の知能指数（EQ）を向上させる教育に最適であった．また木製の玩具は壊れにくく，孫の代まで受け継がれる暖かい玩具を提供することができることも木製玩具の魅力である．

A 社の木育は子供たちの成長に最適な玩具を提供し，「こどもの能力を引き出すおもちゃ」で子育てを楽しくする活動の一つの手段として行われている．

2007 年に雑貨企画販売業として東京で A 社を設立し，2010 年に沖縄で活動を始めた．この頃から木の玩具を中心とした事業内容が増え始め，出張おもちゃ広場事業やおもちゃの販売製作をスタートさせた．2013 年には木の玩具で遊べるおもちゃ店 C を開所し，玩具のレンタル事業やキッズスペースコーディネート事業，オリジナル製品の開発を開始する等，活動の幅を広げている．

沖縄県内での木育の活動としては，2011 年に那覇市の保育園・児童館で木育講座を行い，那覇市保育課で全児童館に木のおもちゃを導入する事業を行った．また 2011・2012 年に行われた沖縄県森林緑地課の事業である「木育キャラバン in ユッカヌヒー」では実行委員長を務めており，その後も地域子育て支援事業として「すこやかおもちゃ広場開所事業」を行っている．その他にも国頭村の木育キャラバンの誘致ややんばる森のおもちゃ美術館の開設にも積極的に携わっており，沖縄県における木育活動の浸透に貢献した．現在も沖縄県と他県を行き来しながら，おもちゃの開発や日本各地・海外からのおもちゃの仕入れ・販売・レンタル・キッズスペースコーディネート等，玩具おもちゃに関する様々な事業を行っている．

3.5.2　活動内容

①キッズスペースコーディネート

浦添市にある，おもちゃ店 C をモデルに，依頼主の要望に合わせ

て子どもが夢中になるキッズスペースをコーディネートし，運営する事業である．「発達面」「安全面」「衛生面」を考慮し，希望の空間で満足度の高いキッズスペースを提供する．これまでに県内外の商業施設やホテル，会議場等，多くの場所でキッズスペース開所した．

おもちゃ店 C は沢山のおもちゃが用意されており，年間 7,000～8,000 人を超える親子が利用している．近所の親子連れだけでなく観光客も訪れる人気の子育てスポットとなっている．

②木のおもちゃ販売

テレビ番組や CM とリンクした流行りのおもちゃではなく，子育てに役立ち，心身の健全な育成に相応しい厳選された玩具の製作・販売を行っている．多数の海外ブランドを取扱い，沖縄製のおもちゃやオリジナル玩具の販売も行っている．子供が十分に遊びこめるおもちゃ，何度も繰り返し遊べる玩具を，「買いやすい」価格で提供している．おもちゃ店Ｃでは販売コーナーを備えており，実際に玩具スペースで遊んだ上で玩具を購入することができる．

また，「Toyderiver」として玩具の出張販売も行っており，実際に多数の玩具を要望のあった施設に持って行き，管理面や予算等を考慮した上で，各施設に合った玩具を提供する．同時に手入れや導入方法等の相談も行っている．

③オリジナル製品の開発

沖縄の風土や文化の中，おもちゃ店Ｃの遊びスペースで遊ぶ子供たちの姿を間近で見ているからこそ作れる，子供たちがずっと遊べる玩具を独自に開発している．県内外の木工作家や木工所等様々な分野の関係者と協力し，広い観点からオリジナルの製品を企画製造している．また県外でおもちゃの部品を作り，沖縄で組み立て販売するという流通経路を確立させた．国頭村森林組合をはじめ，県内の各玩具販売店に卸す役割も担っている．

玩具に使用する木材としては「適所適材」の考えを採用しており，県産材にこだわる必要はないと考えている．設計された玩具の性質や用途に適した木材を選択することが最適であるため，県産材も他地域の木材も輸入材も全て活用する．質の良い玩具を客の手の届く価格で提供することが重要であり，用途・材・質・価格のバランスが大事であると考えている．

④木のおもちゃレンタル

おもちゃ店 C で取り揃えているおもちゃの貸し出しをしている．2013 年より玩具のレンタル事業をスタートし，2016 年から「Rentoys/レントイス」としてサービスを拡大した．レントイスは，1 週間のレンタル期間を基本に，対象年齢や人数に合わせて 3 つのコースが選択できる．また自宅用に単品のおもちゃレンタルも行っており，客は用途に合わせておもちゃを借りることができる．気に入った玩具はレンタル後に購入することも可能だ．

⑤各種セミナー

子育てに不可欠な木育の話を，おもちゃの開発者として，母親として，日々おもちゃで遊ぶ子供たちを見ているおもちゃのプロとしての視点から，「おもちゃと遊びに関するセミナー」と題して行っている．さらに，木育に関することだけでなく幅広く玩具や子育てに関する講演会も行っている．

3.5.3 今後の意向

「木育」という言葉を使って活動するというより，木の玩具の魅力や子供が本当に必要としている玩具を広めていけるような活動を行っていきたいと考えている．

3.6 東風平木工芸組合 B 工房

3.6.1 取り組みの経緯と目的

八重瀬町にある東風平木工芸組合は，4 人の木工作家が運営する工房・ギャラリーである．工房では，夏休みや長期休暇に子どもを対象とした木育のイベントを開催しており，県内中南部を中心に木育の普及に取り組んでいる．その一人である K 氏は，個人の B 工房を運営しており，本業の傍ら積極的に木育の活動を行っている．ここでは，K 氏を中心にその活動を調査した．

K 氏は木工を始めて約 10 年が経過した頃，モノを作ることを子供達に教えるワークショップを開くようになった．次第に「作って楽しい」だけのワークショップに違和感を覚え，環境教育を学び始める．環境教育としての教え方やワークショップの作り方を学んだ後，自身の本業であるモノ作りを活かし木材に特化した活動を考案した．そして 2000 年代に入り「木育」という言葉が生まれその考えに共感し，少しずつ木育という言葉を使って活動するようになった．2011 年には県の事業として行われた木育指導者(推進員)養成講座に参加し，木育指導者の認定を取得した．以来自らイベントを企画したり，木育講座の依頼を受けて対応したりする等，積極的に活動している．

K 氏の木育の理念は，「ただ木を使えばいいというわけではなく，より良い社会のためにエコロジカルな生活をし，持続可能な社会を作っていかなければならないことを考える」ことである．経済効果の有無だけが目的ではなく，自然や環境も視野に入れつつ，身近なところから自然を感じられる取り組みを目指している．木育の対象は，子供や大人等限定せず「すべての人」としている．子供からお年寄りまで木に触れる機会は等しく必要であり，対象となる受け手に合わせたカリキュラムを作る必要があると考えている．

3.6.2 活動内容

① 地域での木育活動

以前は自らイベントを企画していたが，現在は主に依頼のあった施設で木の話と木工体験をする木育講座を行っている．木の話では木育の説明や沖縄の木に触れ，木を知ってもらう体験等を行い，木工体験では身近なギンネムを使ったボールペン作りを行う．直接木に触れてもらいながら，普段使う機会のあまりない工具も同時に使えるようになってもらうようにしている．依頼者や参加者からの評判はとても良く，多い時で年間 30 回程度の依頼が来る．

木工や木育で使用している木材は，県産材を中心に，輸入材や移入材，廃材，古材も利用している．すべて県産材を使えばいいということではない．すべての木材を用途に応じて有効に利用しながら，持続可能な範囲で県産材をどう活かすかを常に意識して，モノ作りを行っている．外来種として問題となっているギンネムを木工教室で使う理由は，町にあふれて困っている材も，有効に活用することで活きてくることを伝えるためである．

写真 3 は，実際に木育講座で作成したギンネムのボールペンである．講座を行う日の前日に工房の敷地内に自生しているギンネムを伐採し，生木のまま講座会場へ持って行く．参加者はそれぞれ好きな部分をのこぎりで切り，カッターやドリルを使ってボールペンを仕上げる．

写真３　木育講座で作成したギンネムのボールペン

②　木育の指導者の養成(一緒に活動してくれる人を作る勉強会)

一般向けに行っている木育の講座を，同じような仕事をしている人に向けて行い，今後一緒に木育の活動ができるように広めている．主に木工職人や木育に興味のある教育関係者や食育関係者，環境教育を行っている方等を対象に，若い人にも木育の活動を広めるきっかけとなっている．

2018 年 9 月 8 日(土)豊見城市のデザイン事務所 D で行われた木育の勉強会に参加させていただいた．15 人程度の参加者が木育の活動について学び，意見交換や交流を行った．木工作家として活動している方でも，深く木材のことを知らなかったので勉強になったという感想や，外来植物として困っているギンネムの活用を考えられたという意見，この日をきっかけに今後は木の命や温かみを感じながら生活していきたいという感想や，初めて息子がカッターを使いとても良い体験になったという意見等があり，それぞれの立場から木育を考える機会となったという印象を持った．

3.6.3　今後の意向

木育で儲けようというつもりは全くないが，しっかり自分の事業になるよう経費はいただいている．ボランティアとして行うと，後々自分自身の負担となり継続していくことが難しくなってしまう．質の良いものを提供するため今後もボランティアとしての木育は行わない．

木育による経済効果は，はっきり「ある」と言える．幼稚園での木育講座をきっかけに，そこで使う家具等の備品の製作依頼をいただいたこともある．カタログから注文するより顔を知っている人に作ってもらうほうが，幼稚園側としても安心できるという依頼者からの意見を聞き，これは木育の効果や意図がしっかりと伝わっていると感じた．大きな経済効果とはいえないかもしれないが，木育の取り組みを通して自らのマーケット作りに繋がっていると感じている．このような形での社会的活動が，依頼者との信頼関係を築き上げることによって本業のオファーへと繋がるため，木育と木工作家としての仕事がしっかりリンクしていると感じている．

長く木工作家として仕事をする中で，次のステップとして，多くの人に木や自然，木材のことを知ってもらう普及活動も必要だと感じている．このような理由から今後も木育活動を続けていきたいと考えている．現在は若い人と一緒に数人の組織を作り，古材を利用してよりたくさんの人にモノ作りを楽しんでもらえる場を作る計画をしている．また，木材を中心とした木育から更に発展させ，直接森や自然と繋がるようなプログラムを考えることや，そのような考えや知識を持った人と連携し，更に木育を発展させていきたいと考えている．

「育」という言葉が付いているがゆえに，子供むけのプログラムであると捉えられがちだが，情操教育だけが木育ではないことを伝えていきたい．

3.6.4　はえばるエコセンター『世界に一つだけの木のボールペン作り』

はえばるエコセンターは，環境保全の普及・啓発に向け情報発信の拠点となることを目的とした施設で，南風原町の児童を対象としたエコツアーや環境講座の開催，リサイクル情報の収集・発信等を行っている．環境講座の一つとして，2016 年から毎年 B 工房の木育講座を取り入れているため，調査を行った．

はえばるエコセンターで行っている環境教育の講座は，ただモノを作るだけではなく，未来の地球にまで想像力を膨らませて環境を考えることによって，自主性を育てることを目的としている．

当施設で，K 氏の木育講座を取り入れるきっかけとなったのは，沖縄環境経済研究所主催で行われた環境教育の講習会である．K 氏の行っている活動内容や木育についての話に共感した．そこで，はえばるエコセンターで木育講座を開講してほしいと依頼したことをきっかけに，現在も開講している．

①　『世界に一つだけの木のボールペン作り』

環境講座の内容としては，全 2 時間で，初めの約 15 分間は木についての話をし，その後にギンネムを使って木のボールペンを作る．K 氏の話す内容や話し方は，とても面白いと評判だそうだ．話の中で実際に木に触れてみる内容も含まれるため，子供や両親を飽きさせず，楽しく環境のことを学べる講座であるという．毎回 20 人程度が参加する人気講座である．

参加料は一人 500 円であるが，参加者からは 100 円徴収し，残りは南風原町の予算で対応しているため，子供でも気軽に参加しやすい価格で開講されている．

身近にある木のことを全く知らない親子が多いため，環境や木のこと，ものを大切にする心の話などに感動した，楽しかったという意見が多く，のこぎりやドリルが難しかったけどペンが仕上がって嬉しい等の感想があがっている．

2019 年 1 月 26 日(土)には，南風原町中央公民館で行われた．講座の内容は通常通り木の話とギンネムのボールペン作りで合計 18 人の親子が参加した．参加者のアンケートより感想を一部紹介する．

・自分で作ったボールペンがとても書きやすかった．楽しかった．
・木の不思議をたくさん知ることができて楽しかった．
・木のことをもっと知りたいと思った．
・子供と一緒に物作りができ，普段使わないドリル等の使い方も教えていただき楽しかった．自分で作ることで物を大切にする心を育てたいと思った．
・木育について学べた．近くにある木などでいろいろなものを作りたいと思った．のこぎりを使うのは初めてだったのでとても緊張した．
・私たちの生活は木で創られたものに溢れているなと思った．

②　今後の意向

この木育講座は，今後も年に 1 回程度続けていく予定だ．当施設では，木育講座だけでなく，やんばるの森や近くの海に行く観察会等，他にもたくさんの環境教育を行っている．おもちゃ美術館のおもちゃセットの貸し出しがあると聞いたので，他にも親子で楽しめる新しいイベントを取り入れていきたいと考えている．

次第に南部の自然も減少し，中南部の子供達が自然に触れる機会は減少している．北部だけでなく南部の自然も守っていかなければならないと考えている．まずはできることから，町内の子供たちに自然について学んでもらう環境教育を進めていきたい．

はえばるエコセンターは，子どもたちに環境を考えてもらうこと，環境学習をしてもらうことを目的としており，専門の講師と子供達を結びつける役割を担っている．これからも，南風原町の子どもたちに，環境を考えることの大切さを伝えていきたい．

3.6.5　沖縄県かりゆし長寿大学校『リサイクル木育講座』

沖縄県かりゆし長寿大学校は，高齢者に学習の場を提供することで生きがいのある生活基盤の確立と健康の保持・増進に役立てることを目的として，1993 年に設立された．社会福祉法人沖縄県社会福祉協議会沖縄県いきいき長寿センターが運営している．当大学校は，地域文化学科，健康福祉学科，生活環境学科の 3 つの学科から構成され，各 64 名，合計 192 名の学生が在籍している．県内在住の満 60 歳以上であれば誰でも応募することができ，抽選で入学者が選抜される．

「リサイクル木育講座」は，生活環境学科の生活系専門科目として開講されている．この木育講座は，「身近な再利用可能な木材を利用した木工から，リサイクルの必要性を学ぶ」ことをねらいとしており，講義の内容は，沖縄の木材を使った木育の話とギンネムのボールペン作りである．高齢者が対象の木育であるため，実際の木材を使って樹種を解説し，木材の特徴や用途等が書かれた用紙を配布していた．また講義の合間には学生が木材を見比べながら「お年寄りの知識と知恵」ともいえる話をしてくれるなど，活き活きとした姿が見受けられた．身近な木は知っていても材になるとどの木かわからないことに気が付き面白かったという意見や，木工作業を孫と一緒にやってみたい，木育が親戚内で話題になった，実際に孫の自由研究で使えた等，木育に興味を持ち，実生活で役立てることができた学生も見られた．

生活環境学科の専門科目では，リサイクル木育講座の他にも環境を学ぶ講義が行われている．「生活と環境問題～沖縄の人々と自然～」では，那覇市首里にある末吉公園で森林散策をし，実際に自然の中で樹木について学ぶことができる講義となっている．

本大学校では，前年度の学生による講義評価で次年度の講義内容が決定されるという仕組みとなっているため，学生の受け止め方次第で今後の講座内容が変化する．リサイクル木育講座に関しては，学生からの評判は高く，2016 年からは 3 年連続で開講している．学校側としては，今後も継続していきたいと考えている．

3.6.6　木育の実践

K 氏の木育講座を技術の授業に取り入れている，うるま市の中学校で，授業の一部を使い木育の講義を実践させていただいた．

リュウキュウマツとクスノキの木材を使って，バランスのとりやすい 3 本足の椅子を作る授業内容となっている．9 月下旬から 10 月にかけて，全 15 時間かけてそれぞれ一人 1 脚の椅子を製作した．予め用意された 3 本の脚と天板をカッターやカンナ，ドリル等を使って適切な大きさに削り，日本の伝統的な木工技術である「ほぞ継ぎ」の技術を体験する．初回の授業は，導入として K 氏がいつも行っている木材の話を中心とした木育講座とギンネムのボールペン作りを行った．

K 氏の木育講座では，木材の話と中心に木の性質や木材の特徴を説明する内容となっているため，筆頭著者は森の機能や森林内で体験した話を中心に，パネルを使って中学生が森林に興味を持ってもらえるような内容を考案した．

初めに筆頭著者自身が大学の森林実習等で出会った生物をいくつか紹介し，木は材としての用途だけではなく，森林内では沢山の生物の住処となっていることを説明した．同時に森の公益的機能についてわかりやすく説明することで，森林が身近な存在であることを伝えた．また，事前に琉球大学農学部の与那フィールドと千原フィールドで収集した，マテバシイ，オキナワウラジロガシ，イタジイ，ダイオウショウ等，数種類の木の実を持参し，実際に触ってもらう時間を設けたことで，実生活に身近なところから森林を意識してもらえる話となったと感じている．写真 4 は実際に講義で使用したパネルの一部である．

写真 4　木育の講義で使用したパネルの一部

全授業終了後，中学生から感想をいただいたので紹介する．

・いつも使っている椅子がこんな風に，沢山の人の手間がかかって作られていることが分かった．
・木の大切さや，木と人間がどのように関わっているのか学ぶことができた．
・木材は鉄などに比べて弱いものだと思っていたが，木は強いということが分かった．
・いつも何気なく見ていて，木は身近にあったけど，木は何にでもなれるなと思った．
・どう切れば木目が綺麗か考えるのが難しかったが，考えるきっかけになった
・同じ過程で作っているのに，人によって形が変わってくることに驚いた．
・木の最初のイメージは，机とかの材料でしかなかったけど，生き物が住んでいたり，森の機能があったりなど，いろんな役割があることを知って驚いた．
・50 年以上も生きている木で作った自分の椅子が，30 年以上も使えることがすごいと思った．とても疲れたけど，楽しかった．
・家や塾に使われている木がどんなものか，何本くらいなのか興味がわいた．
・作業は疲れたし，木や森林に興味は湧かなかった．もうやりたくない．

これらの感想から，木育講座の全体を通して子どもたちの森林に対するイメージや何気なく使っていたモノに対する意識に変化があったと考えられる．興味ない等のマイナス意見も得られたため，興味や関心によって受け止め方に個人差があることもわかった．筆頭著者自身豊富な経験があるわけではないが，大学の授業で森林に関することを

学んでおり，実体験を基に自分の森林・林業に対する想いを伝えるだけで十分な“木育講座”になるのではないかと感じた．

4　利用者の認識

4.1　既存資料の分析

4.1.1　平和創造の森公園『山の日特別企画』

平和創造の森公園の事務局が行った木育イベントに関するアンケート調査の回収結果を分析することとした．アンケートでは，参加者の年齢，大人と子供それぞれの満足度を 1～5 の 5 段階で評価してもらい，その他 6 項目の質問に自由記述で回答していただく形式となっている．回答は任意に行われ，回答者の年齢や回答方法等も統一されていなかったため，正確な分析は難しいと考えられるが参考として感想や要望を分析することとする．回答数は木の実験教室が 3 回答，マイ箸・スプーン作りが 8 回答，木灰汁そば作り体験が 11 回答の合計 22 回答となっている．

参加者の年齢層としては，40 代の大人と小学校低学年の子を持つ親子連れが多く(図 1)，満足度としては 22 回答のうち 17 回答が大人も子供も最高評価の 5 を付けていた．「子供よりも大人の方が楽しめた」という回答がみられ，3 人の回答者が子供よりも大人の方が高い評価をつけている．

料金については「ちょうど良い」という回答が半数を占めているが，親子ペア 2,500 円の木灰汁そば作り体験では，11 回答中 10 回答が「高い」と答えており，1,000 円程度の料金を希望する回答が多く見られた(図 2)．木の実験教室とマイ箸・スプーン作りでは，全ての回答が「安い」もしくは「ちょうど良い」で，高いという回答は見られなかった．

その他の自由記述については，実際の記述を紹介する．

【今後参加してみたいイベント】
・敷地内の森林探検，クワガタ等の昆虫観察，虫カゴ作り
・ロボットやコップ等，色々なモノを作る体験
・森の木の観察会等
・木や草を使った玩具作り
・季節に合わせた体験学習
・森林公園の生物（昆虫，爬虫類，植物等）の観察，捕獲等
・トレッキング等のアドベンチャー的な散策
・三線体験，ピザ作り，キャンプ等
・森林公園内の探検，木や昆虫の観察

【改善点】
・道具の使い方がよくわからなかったので，教えてほしかった．
・木材が思ったより硬くて時間がかかった．
・糸満市は場所が遠い．もう少し近い場所が良い．

【その他感想等】
・大人でも忘れていたこと，知らなかったことがわかってよかった．
・じっくりマイ箸を作れたので良かった．
・危険なモノ(包丁)でも，きちんと説明して安全に使わせてもらえたので良かった．
・家族みんなで楽しむことができた．
・変に端折って短くするのではなく，しっかり説明があってよかった．

以上の記述から，森林公園では木工体験だけでなく，実際に森林の中に入り，自然と触合える体験を希望する意見が多いことが分かった．平和創造の森公園は森林公園であるため，近くの森林を活かした生物観察等のエコツーリズムのような木育体験が期待されている．また，子供向けという印象が強い木育イベントだが，実際に親子で創作していると，子供よりも大人のほうが夢中になり，時間をかけて丁寧に仕上げる方が多いという意見もあった．

4.1.2　沖縄県かりゆし長寿大学校『リサイクル木育講座』

リサイクル木育講座の受講生から，感想や意見をいただいたので，ここで紹介する．
・木育というのを初めて知り，大変勉強になった．
・木の種類当てがとてもためになった．バルサ材がシャボン玉になることを初めて知った．
・楽しくボールペン作りができた．とても楽しい講義だった．
・木育講座は奥深かったので，もっと話を聞きたかった．
・身近な材料でボールペンを作れることを知り，興味を持った．
・木を大切にしていかなければならないと思った．
・機会があれば，家でも木を使った物作りに挑戦してみたい．
・木育って何だろうと，楽しみにしていた講義だった．色々と勉強になり，また楽しくボールペン作りに参加することができた．
・自然に囲まれて育った私だが，今回の講義で知ることが多く，とても感動した．何時間でも学びたいと思った．
・自分で作ったマイボールペン，大事に使用したい．
・久しぶりの工作の時間に，子供心を思い出した．
・工具を使ったボールペン作り，初めて電動ドリルを使ったがうまくできて楽しかった．
・先生がおっしゃっていた「人の心に木を植える，心の森づくり」という言葉に感動した．
・木育の講義を通して感じた小さな感動を大事に育てたいと思う．
・とてもわかりやすく，素晴らしい講義だった．もっと木の勉強がしたい．

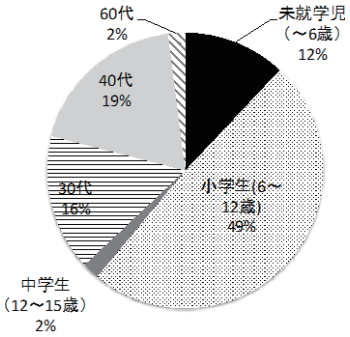

図 1　参加者の年齢

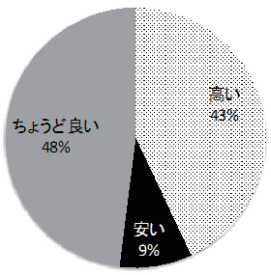

図 2　利用料金について

・もっと気を育てるための学習ができればと思う．特に，沖縄の植木について学びたいと思った．もっと講義を聞きたかった．
・以前から孫に木の玩具をあげているので，これからどう成長に木の玩具が影響するのか楽しみになった．
・初めて木をのこぎりで切り，カッターを使ってモノ作りをした．楽しく学べた．
・身近な木を使ったボールペン作りというアイディアがとても新鮮だった．
・木に対する知識が全くなく，色々学ぶことができた．日常生活においても，植物に目を向けるようにしたい．

・初めて受けた木育講座だったが，楽しく学ぶことができた．何気なく見ている木の枝も，手を加えて形を作っていくと，素敵な文具に変身して愛着が湧いた．大切に使いたいと思う．もっと受けたい講義だった．
・木の強度計測や木の種類当て等，初めて見たものが沢山あり勉強になった．
・何気なく生活する日常の中に，木育につながるものがあると気付けた．色々なものに関心を持って学び，大切にしたいと思った．
・日頃から木に囲まれた生活をしているが，名前等知る機会があまりなかったので，今回の講義で沖縄にも色々な種類があることを知り，木に興味を持つことができた．
・講義で木材の名称がほとんど言えず，関心の無さを恥ずかしいと思った．
・ガジュマル，グアバ，桑の木，シークワーサー等もっと身近な木を材料にしてほしかった．
・身近に見慣れている木々も，工夫次第で楽しい作品になるものだと思った．廃材としてごみに出していたが，木を見直し，この楽しさを孫たちに伝えたいと思う．早速夏休みの宿題に挑戦したい．

以上の記述より，木育は高齢者にとっても有意義な講座となり，学ぶことが多いことが分かった．自然について詳しく知っている方は少なかったが，自然や環境に興味のある学生が多かった．実生活に役立ったという意見も得られたが，もっと身近な木について知りたいという意見も見られたことから，木材としての樹種だけでなくもっと生活に直結する樹種を使った講座内容の検討が提案できる．

4.2 木育関連施設におけるアンケート調査の分析

4.2.1 国頭村森林組合『安波ダムクイナ祭り 木工体験コーナー』

安波ダムクイナ祭りで，国頭村森林組合主催の木工体験コーナーの参加者を対象にアンケート調査を行った．本調査では 21 人から回答を得ることができ，18 の有効回答が得られた．

回答者の属性については男性 8 人，女性 10 人で，居住地域は沖縄本島の南部 9 人，中部 3 人，北部 6 人であった．中南部から来た参加者が約 7 割を占めており，最も回答数の多かった市町村は那覇市の 4 人で，次いで国頭村 3 人，名護市 2 人となっている．回答者数のうち 16 人が親子で訪れており，40 代の両親と 10 歳以下の小学生での参加が最も多い結果となった．やんばるの森を訪れる回数は，15 人が「4 回以上」と回答している．また，「これまでに農林水産業や自然に触れる機会はあったか」という問いに対して，最も多かった回答が「以前から自然や環境について興味や関心がある」の 8 人で，6 人が「そのような経験はなかった」と回答している．安波ダムクイナ祭りの木工体験コーナーを知った手段として最も多かったのがダム祭りのパンフレットで，国頭村森林公園ホームページや，ダム祭りのメーリングリストという回答もあった．図3～6は，これらの回答をグラフに表したものである．

木工体験に参加した目的については，「クイナ祭りに参加したかった」「木工体験に参加したかった」「子どもを遊ばせるため」が同数の 8 回答で，全ての回答者がいずれかに回答していた．「観光のついで」と答えた回答者はいなかったため，祭りに参加するために，国頭村に来ていたことがわかる．体験した木工メニューは，マイ箸作り6人，クイナキーホルダー作り 10 人，コマ作り 4 人，ヤンバルクイナのたまご作り 4 人となっており，4 つすべてに参加した回答者が 1 人いた．一つの体験につき一人 500 円という価格については，14 人が「ちょうど良い」で 3 人が「高い」と回答している．3 人とも希望する価格を 300 円と答えていた．滞在時間については，「1～2 時間」が最も多く，4 時間以上滞在した回答者も見られた．また，「木工体験を通して学んだことはあるか」という問いに対しては，「やんばるの森や自然について」「木や植物について」が最も多く，「なし」と回答したのは 1 人であったことから，木育の体験が参加者に何かしらの影響を与えていると考えられる．図 7～10 は，これらの回答をグラフで表したものである．

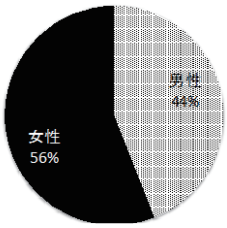

図 3 回答者の性別

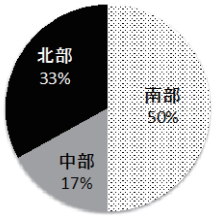

図 4 回答者の居住地域

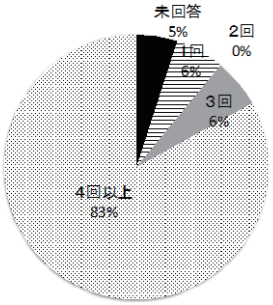

図 5 やんばるの森を訪れた回数

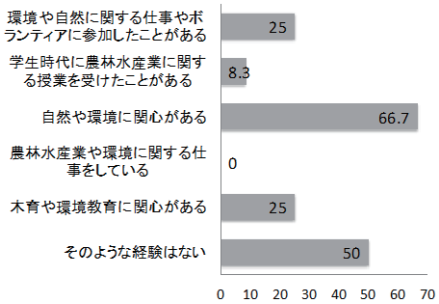

図 6 これまでに農林水産業や自然に触れたことはあるか

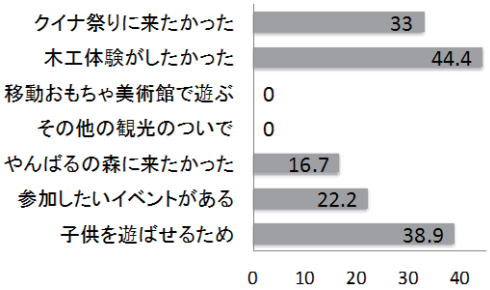

図 7 来場の主な目的

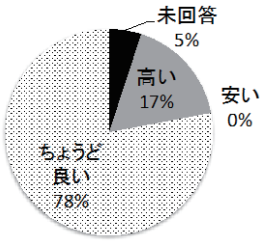

図 8 利用料金について

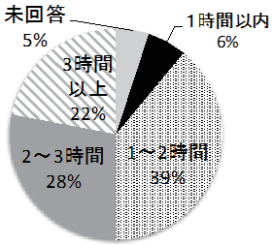

図 9 滞在時間

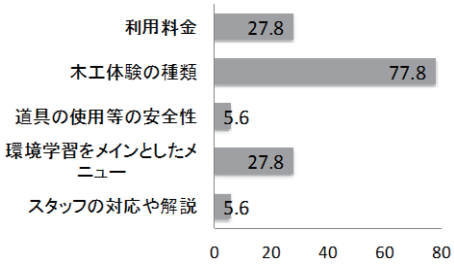

図 13 今後の改善点はあるか

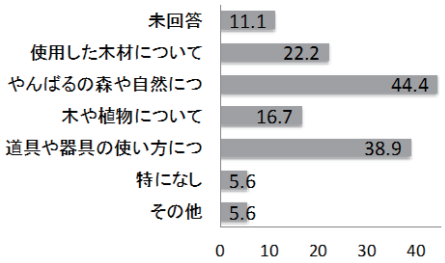

図 10 木工体験を通して学んだこと

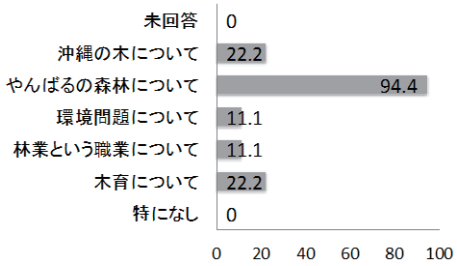

図 14 木工体験を通して興味を持ったこと

クイナ祭りの会場には，やんばる森のおもちゃ美術館の移動おもちゃ美術館も出展されており，10 人の回答者が利用していた．移動おもちゃ美術館を利用して，広々とした遊びスペースや木のおもちゃの香りに満足したという回答が多く得られた(図 11)．「木製玩具の魅力は何だと思うか」という質問に対しては「木の質感・色・形」が最も多かった(図 12)．

木工体験コーナーの改善してほしい点は，「木工体験コーナーの種類の充実」が最も多く，「料金を安くしてほしい」という回答も多かった(図 13)．今回の体験を通して興味を持つことができた項目に関しては，17 人が「やんばるの森について」と回答しており，「なし」と回答した人はいなかった(図 14)．また，回答者 18 人全員が「大人も子供も楽しむことができた」とし(図 15)，「また参加したい」と回答していることから，満足度は高かったといえる(図 16)．

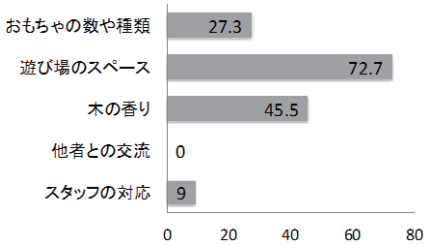

図 11 移動おもちゃ美術館を利用して満足した点

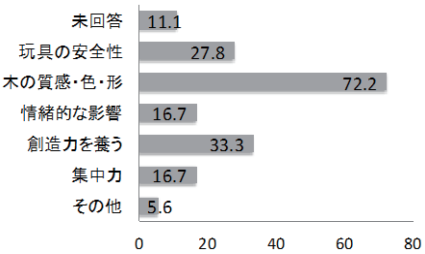

図 12 木製玩具の魅力

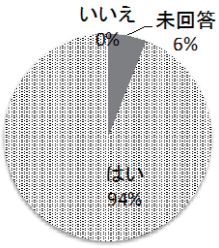

図 15 大人も子供も楽しめたか

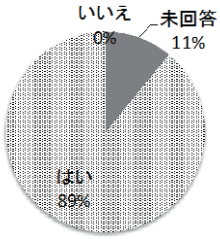

図 16 また参加したいか

自由記述については，実際の記述を紹介する．自由記述の回答数は 15 回答で，7 割の方が回答している．

【楽しかった理由】

・小学生の時，苦手に感じていたことを改めて体験することで楽しさを感じた．

・子どもが，自分で作ったキーホルダーを大切そうにしていた．とても喜んでいた．

・実際に自然と触合い，遊ぶことができた．

・子どもが楽しそうに集中して取り組んでいたから．意外とすぐ作れて驚いた．

・夏休みの宿題以来の工作だったので，とても真剣だった．

・普段このような体験はできないので，とても楽しかった．

・作るという作業が楽しかった．モノ作りが好きなので楽しかった．

・手作りすることで，子供の集中する姿を見ることができた．

【また参加したい理由】

・時には木に触れることも大事だと感じたから．

・子どもが満足していて，子どものためにまた参加したい．

・今度は違うおもちゃを作ってみたいから．

・子供と一緒になって体験できるのが楽しいから．

・このような内容の体験イベントはあまりないと思うから．

・自然に触れる機会は，実際に体験することができるので非常に良いと思う．

・沖縄でも地域によっては自然体験をできるところ，中々できないとこ

ろがあるのでまた参加したい．特に那覇では難しいと思う．

【自由記述】

・色々な体験やイベントに参加できて，自然の楽しさを改めて体験できた．

・楽しいイベントだったけど，料金がもっと安い方がいい．

・のこぎりを初めて使ったので，とても良かった．

・林業は北部かもしれないが，中南部でもイベントを開催してほしい．工芸産業や商工業と組み合わせたイベントだと，更にいいと思う．沖縄の人は「無料」や「飲食コーナー」が充実していれば，参加すると思う．

・もう少し涼しい時期だと良い．木に触れて楽しめるので良い機械である．毎年参加している．

・子どもがコマ作りに特に集中して作成していて，自分で作ったのでとても気に入っている．このような気持ちは体験しないとわからないことだと思う．また参加したい．

・子供にコマ作りをさせたが，とても真剣な表情をして取り組んでいた．自分で何かを創るというのはとても良い体験だと思う．何でもお金で買える時代の子ども達は，このような体験をすることで，心が豊かになると思う．

・木育の普及，啓蒙活動費の捻出は厳しいと思うが，様々なイベントにブースを設けて，今後も取り組んでほしい．

・木製品は高いので，もっと手軽に買える値段だと嬉しい．

・山原の自然や体験をすることで，子ども達が未来に残すように努力してくれると思う．

4.2.2 やんばる森のおもちゃ美術館

2018 年 11 月 23 日(土)に，やんばる森のおもちゃ美術館で利用者を対象にアンケート調査を行った．開館時間の 10 時から 16 時まで入り口付近に滞在し，利用者の帰り際，又は子どもが遊んでいる最中の手が空いた時間を利用して回答していただいた．1 日で 25 人の有効回答が得られた．

回答者の属性については，男性 8 人，女性 17 人で，居住地域は南部 10 人，中部 6 人，北部 4 人，県外 3 人であった(地域不明県内 2 人)(図 17)．中南部から来た参加者が約 6 割を占めており，森林公園の宿泊施設を利用している観光客の来場が見られた．年齢層は，30 代の両親と未就学児の家族での来場が最も多かった(図 18)．「これまでに農林水産業や自然に触れる機会はあったか」という問いに対して，8 人が「そのような経験はなかった」と回答しているが，未回答を除く 15 人がこれまでに何らかの形で自然に関わる体験をしたことがあると回答している(図 19)．当美術館を知った手段としては，国頭村森林公園 HP とロコミが最も多く，その他の記述では，沖縄県内のイベント情報を提供しているサイトである「ごーやーどっとねっと」という回答があった(図 20)．また，約 7 割の回答者が初めて訪れると回答しているが，宜野湾市や沖縄市の中部地域在住者を含む 8 人が 2 回以上と回答している．リピーターの利用も見られた．

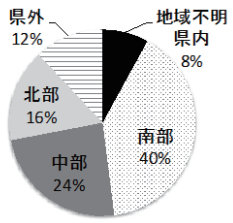

図 17 回答者の居住地域

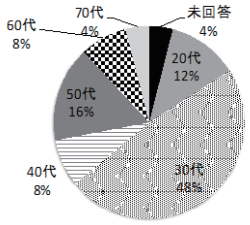

図 18 回答者の年齢

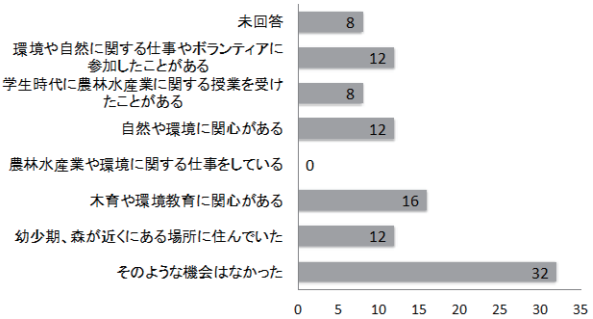

図 19 これまでに農林水産業や自然に触れたことはあるか

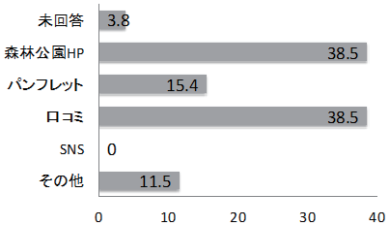

図 20 おもちゃ美術館知った手段

当美術館を訪れた主な目的は 7 割の回答者が「子どもを遊ばせるため」と答えており，クイナ祭りのアンケートではみられなかった「観光のついで」という回答も得られた(図 21)．現状の大人 400 円，子ども 200 円という利用料金については，ほとんどの回答者が「ちょうど良い」としているが，3 人が「高い」としている(図 22)．希望の料金は，現在の半額の「大人 200 円，子ども 100 円」という意見や，「大人 100 円，5 歳以下無料」「子ども無料だともっと利用しやすい」という意見も得られた．当美術館を利用しての満足な点で最も多かった回答は「玩具の数や種類」であったが(図 23)，改善点においても「玩具の数や種類を増やす」が最も多く，更に玩具の充実が求められていると考えられる．改善点の自由記述では，「玩具の遊び方を教えてくれる人がいたら良い」「木工房と連携した取組があったらいい」との意見もあった．木の玩具のメリットは「木の質感・色・形」「想像力を養う」が最も多く(図 24)，クイナ祭りのアンケートと同様の結果となった．木の玩具で遊ぶ子どもの様子に普段と変わったところはあったかという質問対しては，半数が変わった様子があったと回答したが，半数が「なかった」「どちらとも言えない」と回答している．変わった様子があったと答えた理由も多数得られた(図 25)．

【子どもの様子】

・いつもより楽しそうに，自分で工夫しながら遊んでいた．

・普通の店に売っていない不思議な玩具に驚いたり，笑ったりしていた．

・遊び方，目の輝きが違うような感じがして，遊びこむ姿があった．

・木の玩具を見て感心し，考えながら集中して遊んでいた．
・車内では喧嘩ばかりの兄弟だが，広いスペースと玩具があるので喧嘩にならなかった．
・普段家庭に木の玩具があまりないので，集中して遊んでいた．
・木のたまごが気に入ったらしく大人しく遊んでいた．
・沢山の玩具があるので飽きずに遊べ，普段より明るい表情をしている感じがした．癒された．

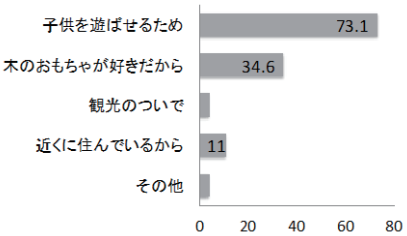

図 21 来場の主な目的

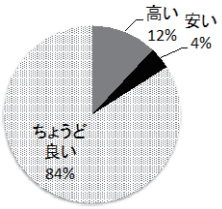

図 22 利用料金について

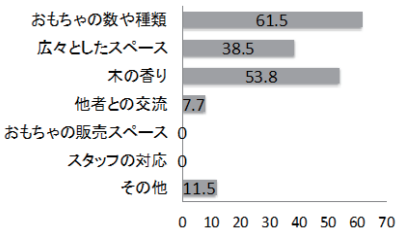

図 23 美術館を利用して満足した点

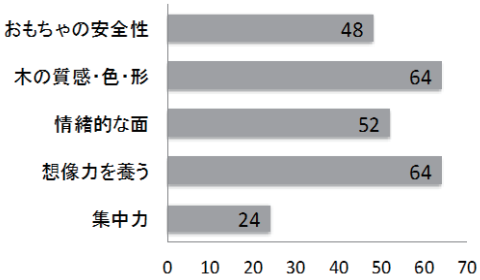

図 24 木のおもちゃを使うメリット

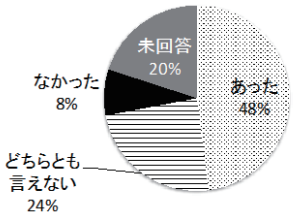

図 25 子供の遊ぶ姿に普段と違った様子があった

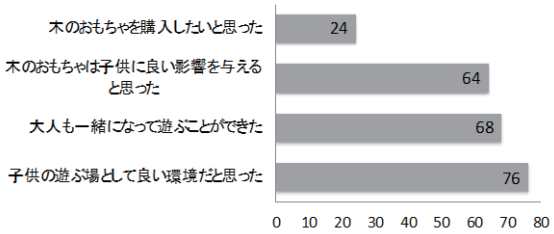

図 26 美術館を利用しての感想

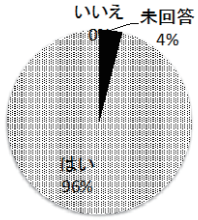

図 27 また美術館を利用したいか

当美術館を利用しての感想は，約 8 割の回答者が「子供の遊ぶ場として良い環境だと思った」と回答している．また，7 割の回答者が大人も子供も楽しむことができたと回答しており(図 26)，「また当美術館を利用したいか」という質問に対して，未回答を除くすべての回答者が「また利用したい」としていた(図 27)．

以下，自由記述について一部紹介する．

【また利用したい理由】
・子供が楽しそうに，落ち着いて遊んでいたから．
・沖縄に来たらまた利用したい．
・木の温もりに触れてほしいから．木の温もりが好き．
・孫ができたらまた来たい．娘にも紹介しようと思う．
・ゆったりとした空間で大人も癒されたから．
・那覇に住んでいる子どもを連れてきたいと思ったから．
・安心して遊ばせることができるから．
・このような場所は他にないと思うので，またここに来たい．

【自由記述】
・また来たいが，場所が遠いので頻繁には利用できない．
・木の玩具は高額なので，日常に取り入れることは難しい．
・プラスチックの玩具等を使うより，木の玩具はぶつかっても優しい音色に感じる．病院等の待合室でも木製の玩具が置いてあると良いと思った．今後も開館していてほしい．
・料金が安かったら何回でも来たいと思った．現在保育士をしていて，「自然を子供たちと学びたい」「五感にふれる」等，したいと思っていたので，沖縄の「木の匂いが違う積み木」はとても興味深かった．保育園では子供の発達を促すおもちゃ，楽しめるおもちゃを置いているので，ここにある玩具を置いてみたいと思った．各保育園，幼稚園にイベントをして，子供の木育をしていただけたら，とてもありがたいと思った．玩具の貸し出しがあったら借りたいです．ただ木のおもちゃは高いので，取り入れたいけれど中々手に入らないのが現状です．
・午後になると人も増えてきて，にぎやかになり，“人だらけ”な空間ではあったが，ワンフロアで子供に目は届きやすいと思った．おもちゃの配置の仕方や部屋の作りは良いと感じた(スロープや階段等)．木の種類ごとで分けられている積み木で匂いをかいで「この積み木とこの積み木が同じ匂い」と子供が嗅ぎ分けていたことに驚いた．沖縄の木

でできた積み木に触れる機会があってよかった.
・初めてきたが，子供たちの楽しそうな声を聴いて，木の温もりに接することのすばらしさを感じた.
・これからも木育について知りたいと思う.
・木や自然環境に興味はあるが，そのようなことに触れる機会が少ない.
・木の玩具は説明がなく自分でどう使うか悩んでいたので，考える力が養えると思った.
・国頭村の自然に囲まれたこの地で子育てがしたかったので，2018 年 4 月に移住した.
・自然の素材は，子どもの情緒の発達に関わる大切なものだと思う.

4.3 木育関連施設と一般の方を対象としたアンケート調査の比較分析

2018 年 11～12 月にかけて琉球大学生とその知人を中心に「木育に関するアンケート調査」を配布し，合計 106 の回答が得られた．木育に関する質問で，安波ダムクイナ祭りとやんばる森のおもちゃ美術館で行った質問と一致する項目については，両者を比較しながら分析することとする．ここでは，安波ダムクイナ祭りとやんばる森のおもちゃ美術館で行ったアンケートをまとめて「木育関連施設」のアンケートと呼ぶこととし，それ以外の一般の方を対象としたアンケートを「一般」のアンケートと呼ぶこととする.

まず，木育の認知度を知るため「木育という言葉を知っていますか」という質問を設けた．木育関連施設では 25.6%の回答者が木育を知っていると答えていたが，一般の回答者で木育を知っていると回答したのは，106 人中 3 人のわずか 2.8%で，全て合わせても木育の認知度は 9.4%であった(図 28)．更に，木育を知っていると回答した 14 人のうち，実際にそのイベントに参加したことがあると回答した方は 1 人であった．その回答者は，子どもが通う幼稚園を通して木育を知り，実際に木のカスタネット作りに参加したことがあると回答していた．他にも木育を知った手段として，玩具関連の雑誌，テレビやメディアで見たことがある，仕事や職場で聞いた，やんばるに行った時ややんばる森のおもちゃ美術館を利用した際に聞いたという回答があった．木育関連施設と一般で認知度に差があったことから，木育に興味のある方が関連施設に来場していると考えられる.

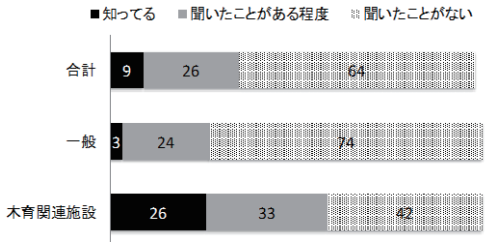

図 28 木育の認知度(%)

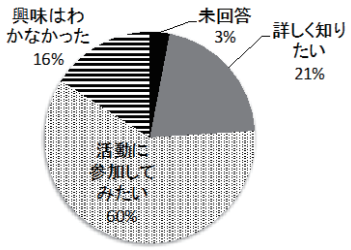

図 29 理念を聞いて感じたこと

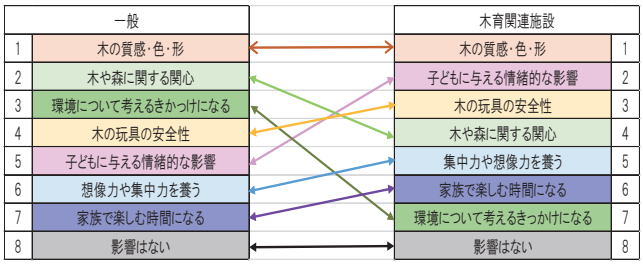

図 30 木育が与えるご自身やご家族への影響

アンケートでは，木育の印象を問うため，北海道木育推進プロジェクトチームで検討された「木育の理念」を記載し，これを読んだ上で木育についてどう感じたか回答していただいた．理念を読んで，「興味は湧かなかった」と回答したのは，木育関連施設 4.7%，一般 19.8%であった．合計すると，「興味は湧かなかった」は 15.4%で，60.4%が「活動内容によっては参加してみたい」，20.1%が「木育の活動について詳しく知りたい」と回答しており，約 8 割の回答者は木育の活動に積極的な印象を持っていると考えられる(図 29).

「木育の活動に参加することによって，ご自身にどのような影響があると考えられるか」という問いに対して，木育関連施設で「影響はない」とした回答者はおらず，一般でも僅か 1.2%とほとんどの回答者が何らかの影響があるだろうと認識している．アンケートでは選択肢を 8 項目用意し，両者共に最も多かったは，「木の質感・色・形」という結果であったが，一般と木育関連施設で以下の順位が異なっていた(図 30)．木育関連施設では子どもや玩具に関する項目が上位であったが，一般では木や森に関する項目が上位に入っていた．一般的なイメージとして，情操教育ではなく環境教育に近いイメージが持たれているのではないかと考えられる．また木育を環境教育と認識して回答してしまった可能性も考えられる.

回答者が木育のイベントに参加するなら，どのような条件を望んでいるのか調査するため，「参加してみたいカリキュラム」「支払い可能な金額」「所要時間」「開催場所の希望」を質問事項に取り入れた．参加してみたいカリキュラムで最も多かったのは，「ペンやお箸等の小物を作る木工体験」で，65.6%が参加してみたいと回答している(図 31)．記述では，20 代男性が「木製品の展示会」，30 代男性が「強度・性質等用途に応じた材木の種類の選び方」と回答していた．木育イベントに参加する際の支払い可能金額は，500 円～1,000 円が最も多く(図 32)，参加しやすい所要時間は，30 分～1 時間が最も多かった(図 33)．参加しやすい開催場所は大型商業施設が最も多く，その他の回答として，「駐車場が整備されている場所」「役所等」という回答が見られた．これらの問いに関しては，一般と木育関連施設で顕著な差異は見ら

れなかったので，両者を合計したグラフで回答の内訳を示す(図 34).

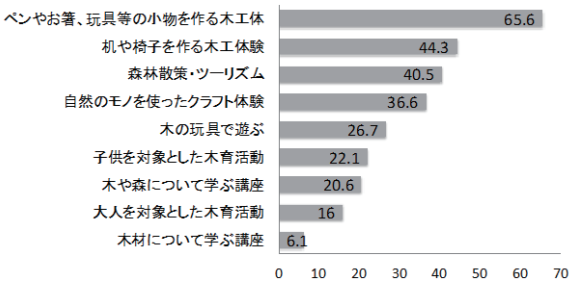

図 31 参加してみたい活動内容

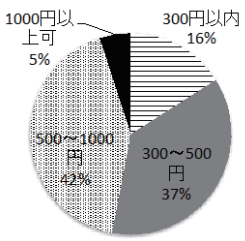

図 32 支払い可能金額

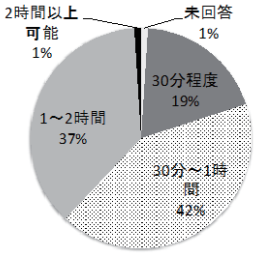

図 33 所要時間

次に，日頃木製品をどの程度身近に利用しているかを調査するために，「木製品を積極的に購入するか」「現在木製品を使っているか」「今後木製品を取り入れていきたいか」という 3 つの質問事項に加え，実際に使用している木製品，購入したい木製品を回答していただいた.「木製品を積極的に購入するか」という問いに対し，木育関連施設では 76.0%が積極的に木製品を購入すると回答していたが，一般では 68.8%が「どちらでもよい」と回答している. また「金属製やプラスチック製を購入する」とした回答者は，どちらも 4%で，合計で見ても 149 人中 5 人であったことから，木製品の購入を意図的に避けているわけではなく，消極的もしくは特に意識していないと考えられる(図 35). 自由記述では「木製品を購入したいと思うが価格が高く，取り入れることは難しい」「用途や物による」という意見が見られた.

「現在木製品を使用しているか」では，全回答者のうち 78.5%が「はい」と回答しており，机・棚・椅子の順で多い結果となった.「今後木製品を取り入れたいか」では，「はい」と回答したのは，木育関連施設と一般のどちらも 69.8%であった.「いいえ」と回答した人について，木育関連施設では一人もいなかったのに対し，一般では 25.5%であった(図 36). 今後取り入れたい木製品で最も多かったのは食器と椅子で，「はい」と回答した 104 人のうち 25 人が木造住宅に住みたいと回答していた(図 37). また，木造住宅に住みたいと回答した人の 92.0%が，木育の定義を聞いて「参加したい」「詳しく知りたい」回答している. また，「木製品を使用することは森林破壊につながると思うか」という問いに対しては，「そう思う」「思わない」「わからない」がそれぞれ同数程度であった(図 38). 自由記述には，「モノによる」「割り箸は環境に悪いと思うが，他は思わない」「使用する材やその原産国，用途等の条件によって変わるため，一概にはどうとも言えない」「実際のところどうなのか詳しく知りたい」という意見があった. これまでの経験として，「農林水産業や自然環境に触れる機会はあったか」という質問事項を設けたところ，全体の 55.0%が「そのような経験はなかった」と回答している(図 39).

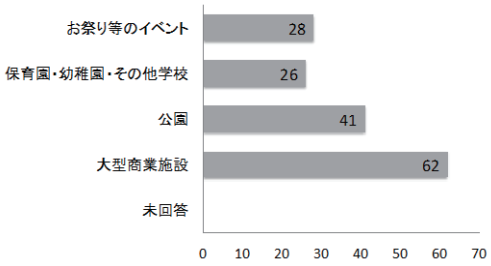

図 34 参加しやすい開催場所

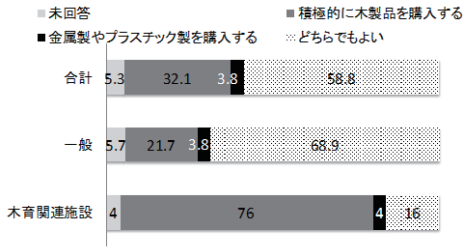

図 35 積極的に木製品を購入するか

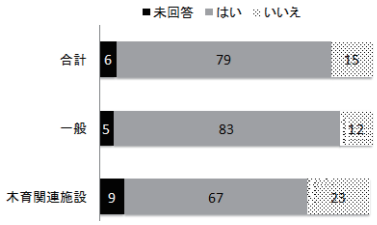

図 36 現在木製品を使用しているか

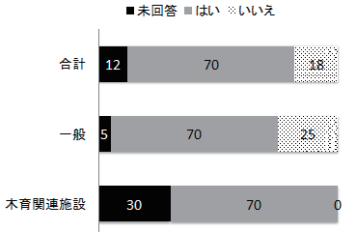

図 37 今後木製品を取り入れたいか

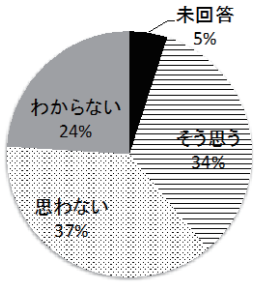

図 38 木製品を使うことは森林破壊につながると思うか

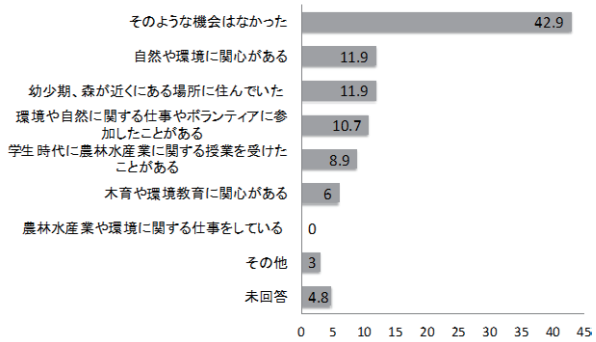

図 39 これまでに農林水産業や自然に触れたことはあるか

本調査の回答者全体の性別，年齢の内訳は以下のグラフの通りである(図 40,41).

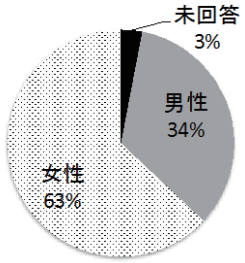

図 40 回答者の性別

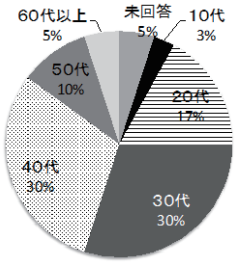

図 41 回答者の年齢

自由記述の回答数は 14 回答であり，木育に興味は湧かなかったとした回答者から意見を得ることができなかった．ここでは一般のアンケートで得られた自由記述による意見を紹介する．

【自由記述】

・木材を積極的に利用し，森林の健全な育成を願う．

・首里城を守るため，伝統の樹木であるイヌマキの植樹についての多くの方に知っていただけるとありがたい．

・子どもたちには積極的に木製品を使ってあげたい．しかし価格が高めであるため，普段のモノとしての購入はためらう．木製品は好きだが，価格がもう少し安くなると購入しやすいと思う．幼稚園や保育園，小学校の食器が木製だと面白いと思った．

・木育を知っている人は少ないと思う．メディア等に取り上げてもらって，「木育」という言葉をもっと広めてもらう必要があると思う．

・木育という言葉を知らなかったので，具体的にどのようなことなのか知識を付けていきたいと思った．機会があれば子どもとイベントに参加したいと思った．今後多くの人に周知されることを願う．

・子ども達を自然に触れる体験へと考えているが，中々機会が少なかったり，参加したくても人数制限があったりと困難なことが多い．開催後に知ることもある．木育は素晴らしい体験の場であると思う．もっと機会が増えると良い．

・木の机や椅子に触れると暖かさを感じ，落ち着く感じがする．

・木製品には癒し効果があると思う．仕事が忙しい時には森の中を歩いて気分転換したいと思うことがある．

・現在木の食器を使っているが，湿気の多い沖縄には向かないと思う．

・科学的な製品より，木製品は温かみがあっていいと思う．

5 考察

5.1 沖縄県の木育活動の分析

沖縄県内で現在行われている木育の活動を表 1 に整理した．これらの調査結果から，県内の木育を目的別に分類すると 3 つに分けることができる．産業としての「林業の振興」を中心に，森や自然全体を学ぶ「環境学習」と素材としての木材の良さを活かした「幼少教育」である．

「林業の振興」としての木育は沖縄県森林管理課・南部林業事務所，国頭村役場経済課，国頭村森林組合がこれに当たる．木育の目的の一つである「日常に木を取り入れる取り組み」として，県産材の需要拡大と林業の活性化を促す手段として位置付けられている．その内容も自然に触れることを通して森林や林業を学び，理解を深めることができるような活動となっている．

次に「環境学習」としての木育は，B 工房・はえばるエコセンター・かりゆし長寿大学の取り組みがこれにあたる．木工体験を通して身近な自然を感じ，木の良さを伝える活動だ．また木育と並行して森林散策やエコツアーなどの環境学習も行っている．

A 社とやんばる森のおもちゃ美術館が「幼少教育」に当てはまる．子供に最適な素材は木材であるとし，子供のころから木製の玩具に囲まれて成長することで豊かな心を育むことができるとしている．より良い木製の玩具を子供たちに提供することが主な活動内容だ．図 42 は，調査対象の目的を分類したものである．矢印の太さは活動の意欲を示し，赤色の部分を中心に各事業を行っていることを表している．

次に担い手の不足が今後の課題として挙げられる．現在森林・林業について深く話すことのできる人材は少なく，増加する木育イベントの要望に対応できる件数が限られている．それゆえ各自人材育成の講座を開講していた．しかし沖縄県には他県のような木育指導者養成講座や木育マイスター育成講座等，指導者の認定制度があるわけではなく，その場の受講だけで終わってしまう可能性がある．また現在行われている指導者養成の講座は関係者を集めているのみで，広く周知されているわけではない．それぞれ副業としての側面が強くその後の活動や事業の定着に結び付けることが難しいことも，木育の指導者が少ない要因の一つであると考えられる．

次に木育の体験メニューの種類についてである．現在行われている木工体験を表 2 にまとめた．このようにほとんどが小物を作る木工体験であり似たような活動内容が多い．確かに参加してみたい活動内容についてのアンケートでは「小物を作る木工体験」が最も多い結果となったが，現在の活動で充実しているといえるため新たなメニューの企画が求められると考えられる．

表１　県内の取り組みのまとめ

	団体	主な目的	活動名	現状と長所
1	沖縄県庁森林管理課南部林業事務所	・森林の管理や林業への理解の醸成 ・県産材のブランド化	・木育出前講座 ・木育体験場所の設置 ・指導者養成の取組	・中南部の小学校から要望が増加し，多くの小学生に興味を持ってもらう良い機会となる. ・石窯を使いという要望も多く，公園内での木育イベントも好評．今後，木育イベントを開催しやすくなる. ・木育を担う人材を育成できる.
2	国頭村役場経済課	・林業の振興 ・木材の普及啓発活動	・ウッドスタート宣言 ・木机・腰掛事業 ・木育キャラバン ・クラフト職人養成講座	・幼少期に木と触れ合う機会を与え，村内の林業の活性化に貢献している. ・6 年間使うものを自分で作ることで愛着が沸き，モノを大切にする心を育てる. ・中南部の子供に木の良さを感じてもらうことができ，村の木育の周知にもつながる. ・国頭村の木材を有効に利用できる人材を育成し，経済の活性化につながる.
3	国頭村森林組合	・組合の仕事の理解普及活動 ・林業の振興	・木工体験 ・おもちゃの貸し出し	・数百円で気軽に参加することができ，親子で木材に触れる良い機会となる.森林組合の仕事の PR にもつながる. ・多くの子供たちに木の良さに触れてもらう良い機会になる.
4	やんばる森のおもちゃ美術館	木のおもちゃによる幼少教育	・常設のおもちゃ美術館 ・出張のおもちゃ美術館	子供の集まる遊び場を提供し，子供のころから木の良さに触れてもらうことができる.
5	おもちゃ店 C	木のおもちゃによる子どもの教育	・キッズスペースコーディネート ・木のおもちゃ販売 ・木のおもちゃレンタル ・各種セミナー ・オリジナルのおもちゃの製作	子供が気軽に木に触れることができる場を提供し，質の良い木製玩具の取り扱いにより，その魅力を発信している．玩具の開発により，各地の木工作家との連携を図る.
6	B 工房	木材を使った環境教育	・地域での木育講座 ・指導者養成の取組	・子供からお年寄りまで，年齢にあった木工体験を用意し，広く木育を展開している. ・木育を担う人材を育成でき，地域の木工作家の繋がりをつくる.

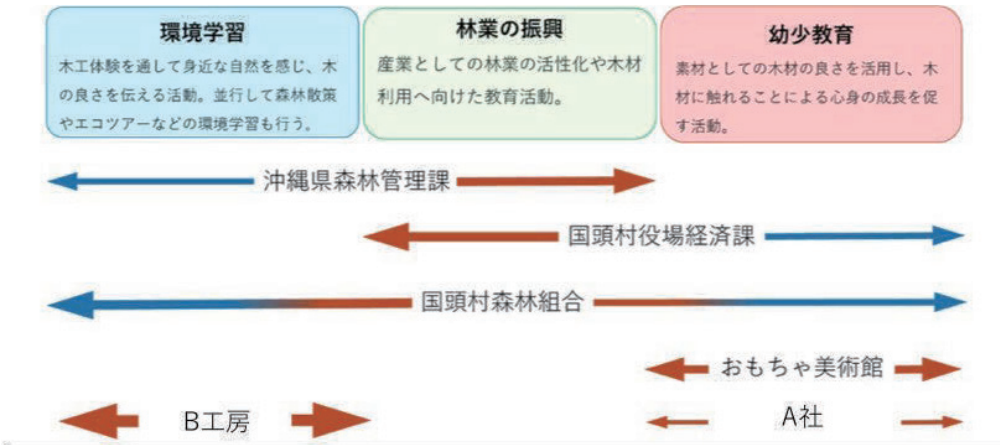

図 42　目的の分類

表 2 木工体験の内容のまとめ

運営	活動内容	
沖縄県森林管理課	・キノコの栽培 ・身近な森林の散策	・ネイチャークラフト ・マイ箸作り
平和創造の森公園	・木灰汁そば作り ・マイ箸・スプーン作り	・木の実験教室
国頭村森林組合	・ヤンバルクイナのたまご作り ・キーホルダー作り	・コマ作り ・マイ箸作り
B 工房	・ギンネムのボールペン作り	

5.2 やんばる自然体験活動協議会の環境教育

ここでは木育の体験内容の参考にするために，環境教育の取り組みを紹介する．

やんばる自然体験活動協議会では木育という位置付けではなく，実体験を通して生物や自然を学ぶ「環境教育」の体験プログラムを開催している．2018 年は，やんばる野生生物保護センターウフギー自然館にて，山原の森を歩いて生き物を観察する「森のお散歩観察会」や解剖を通して生物の生態を学ぶ「アクティブレンジャーの解剖教室」等のイベントを行っており，月に 1～2 回程度普及啓発を兼ねた自然体験イベントを開催している．

やんばる自然体験活動協議会では，森の大切さを伝えることを目的とした環境教育も行っている．現代の子供達は自然とかけ離れた生活をしているため，それらを感じる経験をすることは難しい．実体験を重視したイベントを行うことで，自然と触合うことの楽しさを学ぶことができる体験を目指している．しかし自然を体験し，それを守っていくことを伝えるだけの取り組みではない．国頭村は戦前より林業を主要産業として生活を営んできた地域であり，木の伐採を含む林業は重要な存在である．林家だけでなく，製材品を取り扱う様々な業種の人々にとっても林業はなくてはならない存在だ．しかし国立公園の指定や世界遺産登録の推進等，森林の活用方法は現在の国頭村にとって大きな問題となっている．やんばる自然体験活動協議会は，自然の保護と利用のバランスが大事であり，またそれが森林・林業の最も難しい問題であることまで考えることを最大の目的としている．

そこで始まったのが「くんじゃん山学校」である．2017 年より国頭村教育委員会（社会教育），国頭村森林組合，やんばる学びの森，やんばる自然体験活動協議会等，国頭村の多くの団体が連携して「くんじゃん山学校」を行っている．山学校とは，自然の中で全身・五感を使って様々なことを体験し学ぶ場のことだ．自然と共生しながら暮らしてきた先人たちは，自然にあるものを有効に活用する知恵や技術を当たり前に持っていたが，現在ではそれが失われつつある．「くんじゃん山学校」ではそれらの生きる知恵や技を次世代に伝え，健全な森林の育成を目指す取り組みを企画している．まだ体制については試行錯誤の段階ではあるが，子ども達が自然の中で学び，森林・林業の理解を深めることができる新たな取り組みとして期待されている．2018 年度は，12 月に「炭焼き体験」を開催した．国頭村内の炭焼き小屋を訪ね，炭焼き作業やタングー（炭俵）作りを体験し，その技術や山仕事の歴史を学ぶイベントとなった．

5.3 今後の展開について

以上の考察から，今後まず体験内容の充実を進めていく必要があると考えられる．アンケート調査から，「森林を活用した内容に参加してみたい」「北部だけでなく中南部地域でも開催してほしい」という意見が挙げられたことから，中南部の身近な自然を活用したイベントの考案が求められていることがわかる．具体的な例として，ネイチャーゲームの活動内容を取り入れることを提案する．ネイチャーゲームとは，アメリカのジョセフ・コーネルが発表した自然体験プログラムである．単純に裸足で草原を歩き自然を感じる体験から，気に入った自然のモノを集めてみんなで共有する体験など 160 種類以上の体験内容が用意されている．沖縄県においても沖縄県シェアリングネイチャー協会がその活動を支援しており，一般の方を対象とした自然体験活動の提供や指導者の養成も行っている．木や自然に関する「すべての活動」と位置付けている木育の特徴を活かし，このような活動とも連携することで木育の活動内容を深めることができると考えられる．

またアンケート調査から「場所が遠い」「中南部でもイベントを開催してほしい」などの意見や，参加しやすい開催場所として大型商業施設が挙げられたことから，日常的に行きやすいショッピングセンターと連携した，多くの人が参加しやすいイベントの開催を提案する．室内の場合大型の機材等を導入することは難しいが，森林・林業についてわかりやすく解説したパネル展を設置しておくだけでも木育の活動といえる．実際 2018 年 10 月から 2019 年 3 月にかけて沖縄県森林管理課主催の「おきなわの木」の休憩展示スペースがイオンモール沖縄ライカムに設置されており，県産材で作られた家具を気軽に体感できる人気の空間となっている．また 2018 年 6 月には沖縄総合事務局農林水産部主催の食育のイベントが開催されており，多くの親子連れが参加した．このように木工体験は設置できなくとも，簡単な座学を開講することは十分可能であると考えられる．また県民が沢山集まる産業まつりでの木工体験の開催も可能ではないだろうか．

次に木育を担う人材不足の問題であるが，「森林・林業・自然が好きな人材」を育成することが望ましいと考えられる．先述の「木育の実践」(3.6.6)で紹介したが，筆頭著者も森林について話をする木育講座をさせていただき，必ずしも高度な知識が必要なわけではないと感じた．森林・林業を学ぶ大学生の知識でも，自然が好きな気持ちと少しの体験を話すだけで十分に木育講座をすることは可能であるといえる．また先述したように，環境教育関係者やシェアリングネイチャー協会関係者[12]との交流を深めることも得策であるといえる．関係者だけではなく，木育に興味のある人材が参加できるような講座を設置し，その後の活動に繋げることができる指導者のネットワークを作る必要がある．

そのために再度「木育指導者養成講座」の設置を検討すべきであると考えられる.

最後に木育という言葉自体とその活動の認知度の向上が必要である. 今回の調査では, アンケート回答者の約 9 割は木育という言葉を知らず, 実際に木育の活動に参加したことがあったのは 1 人であった. また森林環境教育と同じであると認識している人も少なくない. SNS やメディア, 現在作成されているパンフレット等を積極的に活用することや, 多くの県民が集まる施設で木育を紹介することでその認知度を高めることができる. 沖縄県内で更に木育の活動を定着させることで, イベントの参加者も指導者に興味のある人材も増加すると考えられる. また, 沖縄県全体で木育を行う目的や方向性を検討し, 木育を行うことによって市民の生活にどう影響するのか, 森林や林業がなぜ必要なのか等,「木育の魅力」をしっかり考える必要があると考えられる.

6　おわりに

木育の先進地といえる北海道や熊本県, 岐阜県等は, 林業が盛んに行われ自然豊かな地域である. 一方で林業を主要産業としているわけではない沖縄県において, 公共団体を始め多くの団体が木育に取り組んでいる現状は評価すべきことである. 本研究で明らかになった課題を改善し, 今後更に活動内容を深めることで活動の発展が期待できると考えられる.

観光客数の急増による受け入れ態勢の問題や世界遺産登録の推進等, 現在の沖縄の森林はその活用に関する様々な問題に直面している. しかし林業に馴染みの薄い沖縄県中南部地域では, 森林・林業に触れる機会は少なく, それらの問題や森林の恩恵を認識することが難しい現状にある. そこで自然をもっと身近に感じ, 沖縄の森林・林業に関心を寄せることができる親しみやすいツールとして木育を活用することが望ましいと考えられる.

今回の調査では, 様々な視点から木育の活動を捉えることができた. 木育に対する想いはそれぞれ異なり様々な意見が得られたが,「木育を通して自然を感じ, 木を好きになってほしい」という想いは共通していたと感じている. また, 木育だけでなく貴重な大自然を有する国頭村が抱える課題や関係者それぞれの想いに触れることができ, 自然の利用方法について考える研究となった. 両親が作った木製のおもちゃで育ち, 木質化された家で暮らしてきた筆頭著者にとって, 木育は共感できる部分が多くとても充実した研究となった. 今後更に木育の活動が定着し, 一人でも多くの方に木や自然の良さを感じていただけることを願う.

文献

1)　沖縄県農林水産部森林管理課『沖縄県森林・林業アクションプラン　うまんちゅの森づくり(後期計画)』

2)　游　潇, 柿澤宏昭. 2019. 北海道における木育の展開過程と木育マイスター活動の実態,林業経済研究　65(3): 1-10.

3)　北海道庁水産林務部 HP『北海道の木育』
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sr/sky/mokuiku/index.htm

4)　三原洸太郎. 2012.「北海道の木工産地における木育活動の展開と意義」

5)　北海道水産林務森林環境局森林活用課. 2017.「木育達人(マイスター)入門」北海道.

6)　林野庁. 2017.「森林・林業白書」

7)　煙山泰子, 西川栄明. 2008.「木育の本」, 北海道新聞社.

8)　田口浩継. 2017.「森林親和運動としての木育 ―ものづくりの復権と森林化社会の実現」, 九州大学出版会.

9)　外山　賢. 2018. 宮崎県の木育ネットワーク』について, 木材情報 2018 年 3 月号,p.12.日本木材総合情報センター.

10)　多田千尋. 2017. 木育から木のファンをつくり地方創生を実現する, おもちゃ美術館のマーケティング手法, 現代林業 2017 年 11 月号,p.14,全国林業改良普及協会

11)　沖縄県庁森林管理課 HP
https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/norin/shinrin/fukyu/h24mokuiku.html

12)　公益社団法人沖縄県シェアリングネイチャー協会 HP
https://www.naturegame.or.jp/about_us/group/okinawa/000